第一章　大君の物語　薫と大君の実事なき暁の別れ

［第一段　秋、八の宮の一周忌の準備］

あまた年耳馴れたまひにし川風も、この秋はいと*はしたなくもの悲しくて、*御果ての事いそがせたまふ（何年も耳に慣れていらっしゃった宇治川からの川風も、この秋はひどく激しくもの悲しくて、姫君は父宮の御一周忌法要を準備なさいます）。　*「はしたなし」は＜無風流だ。粗暴だ。＞という語感で、雨風の形容としては＜激しい＞と古語辞典に例示指摘がある。　*「おおんはてのこと」は注に＜八宮の一周忌の法要。昨年の秋八月二十日ごろに薨去した。＞とある。

おほかたのあるべかしきことどもは、中納言殿、阿闍梨などぞ仕うまつりたまひける（全体の仏式行事の次第は中納言殿と阿闍梨が取り計らいなさいました）。

ここには法服の事、経の飾り、*こまかなる御扱ひを（姫君たちは僧の式事法衣や納経巻の装丁などの小道具類の御仕立てを）、人の聞こゆるに従ひて営みたまふも（女房たちが説明申し上げるとおりに作業なさるのも）、いとものはかなくあはれに（実に頼りなく情けなく）、「かかるよその御後見なからましかば（このような他家からの御援助がなかったら、身内縁者だけではとても立派な法要が出来ないだろう）」と見えたり（と思われました）。　*「こまかなる御扱ひを人の聞こゆるに従ひて営みたまふも」は姫が小物の作成作業をするように読めるので、実際に何処まで遣るのか不思議な気もしたが、下に姫が紐を作る場面があって、正に姫が作ることに重要な意味がある語りになっていて、この文がその前振りとして利いていることが、後で分かった。このノートも後付けだ。

*みづからも参うでたまひて（薫中納言は御自身でも宇治山荘に参上なさって）、*今はと脱ぎ捨てたまふほどの御訪らひ（喪明けに姫君たちがお色直しなさる時の御装束を）、浅からず聞こえたまふ（立派に揃えて御見舞に贈り申しなさいます）。　*「みづからも参うでたまひて」は注に＜薫自身。＞とある。こういう主語省略には未だに慣れない。使者だけで役目が果たせそうな見舞に、わざわざ本人が出張るという言い方をするのは、この中では薫君だけだろうから、それらしい見当は付くが、私の感覚では他の事情の可能性も排除できず、とても断定しきれない。作者や当時の読者が是を普通に読み進むとしたら、その生活感に私とは根本的な相違がありそうだ。　*「今はと脱ぎ捨てたまふほどの御訪らひ」は、渋谷訳文に＜今日を限りに喪服をお脱ぎになるときのお見舞い＞とあり、確かにそう言う言い回しには聞こえるが、具体意が分かり難く、与謝野訳文に＜除服後の姫君たちの衣服その他＞とあって分かり易かった。

阿闍梨も*ここに参れり（中納言殿が通された南廂の客間には、阿闍梨も参っていて、御簾内の母屋に居る姫君たちが）、*名香の糸ひき乱りて（仏事用の房紐がまだ撚り合わされずに乱れているのを）、「*かくても経ぬる（私たちも父宮亡き後は、こんな風に当ても無く暮らしてきました）」など、うち語らひたまふほどなりけり（などをお話し申していらっしゃる所でした）。　*「ここに参れり」は注に＜山の阿闍梨が姫君たちの邸に来ていた。＞とある。基本的には従いたいが、此処で「ここに」という話運びが示す場面は、薫中納言と同じ南廂の客間のこと、のように聞こえるので、あえて左様補語して置く。というのも、御簾内の姫君たちは廂客間の阿闍梨と話をしていた、と読みたいからだ。また同じ理由で、「参れり」は終止形ではなく連用中止と読んで置く。　*「名香の糸（みゃうがうのいと）」は何のことか分からないが注も無く、手元の辞書にも項目が無い。ただ、「名香（みゃうがう）」は＜仏に奉る香。仏前にたく香。＞と大辞泉にあるので、仏事

に使う絹糸、ではありそうだ。で、下に「結び上げたるたたり」とあって、「たたり」は二点か三点の立て棒に糸を張り巻き渡して、糸の巻きを揃えて絡まりを防ぐ、または糸の長さを揃えること、およびその道具のことらしく、となると、「結び上げたる」は所定の長さや分量に糸が巻き揃えられて、まとまった形になっている状態のこと、かと思う。または、実際に一定の長さに切り揃えられた糸が、何本かごとに端を結ばれてあって、それぞれに縒りを掛けて細い紐を作り、更にその細い紐を二本か三本で編み組んで太い紐にしたか、その準備をしていた、のかも知れない。というのも、この帖の巻名の「あげまき」は「揚巻結び」という飾り紐の結び方の事でもあり、画像検索では神前の引幕の真正面に魔除けみたいに下げられているものが多いが、その紐こそが仏式では「名香の糸」と言うとしたら、文のまとまりが良くなって、言い換えには都合が言い。　*「かくても経ぬる」は注に＜『源氏釈』は「身を憂しと思ふに消えぬ物なればかくてもへぬる世にこそありけれ」（古今集恋五、八〇六、読人しらず）を指摘。＞とある。歌の「かくても」の「かく」は「身を憂しと思ふに消えぬ」「身」であり、此処で言う「かく」は「名香の糸ひき乱る」なのだから、絹糸はまだ撚り合わせる前のばらけた状態で、その千々に乱れるさまを、父宮を失って呆然とまとまった考えが持てない姫たちの心境に準えた言い方なのだろう。と、私なりに分かるように注釈にも助けられながら文意を整理したが、本文はいくら見直してもオニのような難文で、定かな所は分からない。

*結び上げたるたたりの（撚る為に結んだ糸の端を掛けたタタリ棒が）、簾のつまより（簾の脇から）、几帳のほころびに透きて見えければ（几張の隙間を通して見えたので）、*そのことと心得て（薫君は、姫君の言う「かくても経ぬる」が糸のほつれに遣る瀬無い暮らしぶりを準えた言い回しと察して）、「*わが涙をば玉にぬかなむ（私の涙を数珠玉にして通したい）」とうち誦じ*たまへる（と伊勢の御息所の古歌の下句を朗詠為さるのです）。　*「結び上げたるたたり」という言い方だが、「たたり」が糸の束を張り広げて、糸の扱いを助ける為の支え棒だとすると、棒を結び上げるとしたら仕舞う時にまとめる為ぐらいのもので、此処がそういう話題の場面とも思えず、となると、結び上げられているのは絹糸で、「たたり」はその糸を撚る為の支柱として、数本の片端をまとめ結んだ糸の結び目を掛けてある棒、と読んで置く。　*「そのことと心得て」の主語は薫君、らしい。注には、この文意を＜姫君たちは名香の糸を作っているのだ、と分かって。＞としてある。「名香の糸」が何なのか判然としないが、姫の言う「かくても」が＜糸のほつれ＞でないと、下の文意に繋がらない気がするので、薫君は「そのこと」を＜姫の言う「かくても」＝糸のほつれ＞と察した、と読んで置く。　*「わが涙をば玉にぬかなむ」は＜「縒り合はせて泣くなる声を糸にして我が涙をば玉にぬかなむ」（伊勢集−四八三）＞と参照指摘がある。「よりあはす」は当然に糸の縁語だが、「泣くなる」は不幸に身をよじって泣き合う周囲の女房たちの姿なのだろう。「玉に貫く」は＜数珠玉を通す＞。「伊勢」は大辞林に＜平安前期の女流歌人。三十六歌仙の一人。伊勢守藤原継蔭（つぐかげ）の女（むすめ）。中務（なかつかさ）の母。宇多天皇の寵（ちよう）を得て、伊勢の御（ご）と呼ばれた。歌は古今集・後撰集などに見える。生没年未詳。家集「伊勢集」＞とある。　*「たまへる」の連体形は下に「なり」が省かれている、と読んで結文校訂としたい。

*伊勢の御もかくこそありけめと（中納言殿が姫君たちの気持ちを見透かしたように引き合いに出して詠唱なさった元歌の詠み手である伊勢の御も、確かにこの自分たちのように悲しんだのだろうと）、をかしく聞こゆるも（興趣深く思えたが）、内の人は（御簾内の姫君たちは）、聞き知り顔にさしいらへたまはむもつつましくて（訳知り顔で差し出がましく同調してお応え申しなさるのも馴れ馴れしく思えて）、　*「伊勢の御（いせのご）」と引歌の作者を明示した語りは珍しい。注には＜伊勢の御は宇多天皇の中宮温子に仕えた女房。『大和物語』にそのエピソードが語られている。＞とある。が、先の注で引歌は伊勢集にあると参照指摘しているのに、「大和物語」のエピソードとは一体、此処の注は何のことを言っているのか。「大和物語（やまとものがたり）」は大辞林に＜歌物語。二巻。作者未詳。一〇世紀半ばに成立。一七〇余の章段から成る。「伊勢物語」と並び称される歌物語だが、全体を通じての主人公はなく、説話集的性格をもつ。

＞とある。が、是では全く分からない。困って検索すると、「露草色の郷」というサイトの＜「大和物語」テキスト＞アップ・ページを見つけた。そのテキストによると、大和物語第一段が「亭子の帝(宇多)いまはおりゐたまひなんとするころ、弘徽殿のかべに、伊勢の御のかきつけける、『わかるれどあひもおしまぬ百敷を見ざらむことのなにか悲しき』とありければ、みかど御覽じて、そのかたはらにかきつけさせたまうける、『身ひとつにあらぬばかりををしなべてゆきかへりてもなどか見ざらむ』となむありける。」ということのようで、どうもこれが「エピソード」らしい。序でに余段を少し流し見たが、先ず全体に、登場人物が実在の固有名詞で語られていることから、架空性のある歌物語と言うよりは、当代事情の小話とか噂話を集めた、確かに当時の「説話集」のような印象だ。特にこの段だけを見れば、歌の背景を＜宇多帝の退位に際して弘徽殿の壁に伊勢の御息所が書き付けた＞と詳しく説明された詞書がある和歌集の趣きであり、といって、二段以降がこの舞台背景を引き継ぐ物語というわけではなく、上段の関連話題の時もあるが、直接の関連が無い場合も多い。ただ、それでも、上段に続いて「おなじ」と関連付けた段が長く続く箇所もいくつかあるので、校訂を工夫して、他資料で背景事情を調べて補語すれば、情緒豊かな物語に仕立て直せるような気もしたが、まさか私は、ただの通りすがりに過ぎない。

「*ものとはなしに(そんなわけでもありませんが、ただ「撚り糸のほつれでもないものを」)」とか(とか詠んだ)、「貫之がこの世ながらの別れをだに(貫之の歌でさえ死別の悲しみでもない旅の別れ道なのに)、心細き筋に*ひきかけけむも(心細いと糸の細さに掛詞しているのですから)」など、げに古言ぞ(などと確かに古歌というものは)、人の心を*のぶるたよりなりけるを思ひ出でたまふ(人の気持を慰める助けになるものと思い出しなさいます)。　*「ものとはなしに」は＜「糸に縒るものならなくに別れ路の心細くも思ほゆるかな」(古今集羇旅-四一五　紀貫之)＞と参照指摘がある。この歌についても、下に「貫之が」と作者明示がある。しかも、此方は地文ではなく、姫の発言文として語られてる。また、姫が言う「この世ながらの別れをだに」は歌の「別れ路」が死別ではなく、この先は此処までの同行者と行き先違いで別れることになる、という事情を説明してさえもいる。尤も、この歌は「羇旅(きりょ、旅情編)」に分類されているから、最初から死別の哀傷挽歌ではないと言えるのかもしれないが、旅立ちはそれ自体で死別や別離を意味するので、この歌を羇旅に組み入れるかどうかは微妙な所もあるような気もする。ただ、それにしても、撚り糸が解れて二本に分かれた形は、本当に地図上の別れ道にそっくりだ。そして、その細くなった一本糸に「心細し」と心情を重ねる、という分かり易い絵柄の歌詠みはヒットの秘訣かも知れない。なかんずく、その分かり易い図案化に於いても、「ものならなくに」に無念さを滲ませる言い回しは、おそらく工夫の為所だったに違いない。「ものならなくに」は＜ものとは違って＝ものならず＞と淡々と事象認識を述べているのではなく、準体助詞の「く」が強調意の代名詞語用されて＜ものではないものなのに→ものじゃないっていうのに→ものじゃあるまいに＞という二重否定での執着を表現している。で、その肝心な部分を、姫はあえて「ものとはなしに」と言い換えている。「ものとはなしに」は「ものならずに」以上に＜別にそういうものと言うこともなしに→その事の真偽に左右されず→それとは関係なく＞という淡々とした、事無げな言い方だ。引歌を「ものとはなしに」に置き換えると「糸に縒るものとはなしに→縁が有ろうと無かろうと」くらいの意味になり、大いに歌意を損なう。にも関わらず、姫は「ものとはなしに」と言い換えた。それは先ず、此処で誰が是を言い換えた所で、広く知られた貫之の歌意自体の解釈は変わらない、と、是がそれほどに有名な歌だということは大前提だ。その上で、あえてこの肝心な部分の言い回しを変えれば、あえて古歌を言い換えた、という事自体の意図が伝わり易い。そして、その意図とは＜別に中納言殿の指摘に同意して、伊勢の歌のように自分たちは泣き暮らしていると言う心算はないが＞という姫の言い訳だ。と同時に、貫之の＜糸のほつれの歌＞のように父宮との別れは無念に思っている、という応答でもある。私はこの場の人たちと共通基盤が無いから、斯様に多弁を労すが、共通基盤がある人たちの会話は、今も昔も是くらいの応酬が日常なのだろう。とはいえ、一章一段からのこの難解さでは先が思い遣られる。　*「引き掛けけむも」の「も」は理由説明の終助詞のようだ

が、下に＜あはれこそあれ＞あたりが省かれた係助詞と見ることもできるのかもしれない。　*「のぶ(伸ぶ、延ぶ)」は＜延びる、くつろぐ＞または＜のばす、くつろがせる＞。

［第二段　薫、大君に恋心を訴える］

*御願文作り(施主の法要趣旨文を作るのに)、経仏供養ぜらるべき心ばへなど書き出でたまへる硯のついでに(経巻や仏像を故宮の供養に霊前に奉納する意向などを書き出しなさる墨硯のついでに)、*客人(客人の薫君は)、　*「おおんぐゎんもんつくり」は＜主語は薫。願文は漢文で書く。＞と注にある。是が薫中納言の役目だということは、当時の人々の普通の了解事項なのだろうか。この場で、阿闍梨でも言い出したか、御願文の事が話題になり、それなら私が一つ書いてみましょうか、と中納言が申し出て、姫も依頼した、みたいな遣り取りがあった上でのことと見るのが普通に思えるが、その事情も当たり前の事として省かれているのだろうか。私には、全く舌足らずの文だ。　*「まらうと」は、この場の中納言殿の立場を示す言い方だろうか。だとすれば、この一言で私が前項ノートで投げ掛けた疑問に答えているのだろうか。つくづく舌足らずだ。

「あげまきに長き契りを結びこめ、同じ所に縒りも会はなむ」(和歌 47-01)

「末長く　あげまき結ぶ　糸の縁」(意訳 47-01)

*注に＜薫から大君への贈歌。「総角」は催馬楽の曲名。その詩句を踏まえる。＞とある。いよいよ「あげまき」という語が出て来た。その催馬楽「角総」の歌詞は「あげまきや(総角や)とうとう(トウトウ)ひろばかりや(尋ばかりや)とうとう(トウトウ)さかりてねたれども(さ離りて寝たれども)まろびあひけり(転び合ひけり)とうとう(トウトウ)かよりあひけり(か寄り合ひけり)とうとう(トウトウ)」とある。此処でいう「あげまき」は「総角」と表記する以前の、古代語で言う子供(成人前の男女)のことらしい〔小学館・日本古典文学全集〕。「尋(ひろ)」は＜日本の慣習的な長さの単位。両手を左右に伸ばしたときの、指先から指先までの長さを基準にし、1 尋は 5 尺すなわち約 1.515 メートル、ないし 6 尺すなわち約 1.816 メートル。縄・釣り糸の長さや水深に用い、水深の場合は 6 尺とされる。＞と大辞泉にある。「尋ばかりや」は、随分髪が伸びた→盛りが付き始めた、という言い方。だから、「さ離りて」は「盛りて」に洒落掛けてあるようだ。「トウトウ」は囃し詞らしいが、「トウトウか寄り合ひけり」が＜疾う疾う食っ付いちまった＞に聞こえるのは、現代語読みの邪道だろうか。で、催馬楽の「あげまき」は＜子供(の髪)＞のことだから、この「詩句を踏まえる」は「長き契り」が＜情交する縁＝夫婦縁＞を意味する、と歌意を示しているわけだ。「縒りも会はなむ」は確かに交じり合う男女の姿態を思わせる。しかし、歌筋での「あげまき」は、あくまで飾り紐の＜揚巻結び＞に掛けて詠んでいて、それは姫が作っている「名香の糸」に因んでいるわけだ。「同じ所に」は＜一緒に住んで＞だが、揚巻結びでは中が井桁に堅く集る事を言うのだろう。こうした機転の利いた洒落心があれば、雲上の高貴な御仁でも、こういう露骨な事を口に出来るということらしい。面倒臭い気もするが、場違いな思わぬ展開を導いて、人生を面白くするものは、確かにこの手の飛躍語用なのだろう。

と書きて、見せたてまつりたまへれば(と書いて姫にお見せ申し上げなさると)、例の、とうるさけれど(姫はまた懸想ごとかと煩かったが)、

「ぬきもあへずもろき涙の玉の緒に、長き契りをいかが結ばむ」(和歌 47-02)

「玉に瑕　涙もろさの　糸の縁」(意訳 47-02)

*注に＜大君の返歌。「契り」「結び」の語句を用いて返す。「もろき涙の玉の緒」に余命短いことをいう。＞とある。「たま」はもともと高価値を示す美辞であり、涙を数珠玉に準えるのは典型的な美辞麗句だ。涙の表面張力は糸を通せるほどの形態保持力はない。涙は糸に触れれば球状を壊して繊維に浸透する。ということは、「ぬきもあへず」は、糸を濡らした涙は僅かなミネラル電解質成分を含む水と認識されて、美辞麗句が通用しない形状となる、みたいな身も蓋もない言い方にさえ見える。しかし、止め処ない涙は糸繊維の水分保持量を超えて、また粒状になって滴り落ちる。むしろ、この止め処ない涙こそが数珠玉に準えられるのだろう。であれば、「ぬきもあへず」は＜貫徹できない＝全う出来ない＝薄命＞という意味が、なるほど主旨なのかも知れない。それでも、「あへず」が「もろき」に掛かる一般物性に基づく説得力は、実に巧みな言い回しに聞こえる。法解釈では論理のすり替えという、悪意があればそれ自体が罪になる、小賢しい手法でも、情趣ものでは見事な転換表現と言えるのかも知れない。

とあれば(と御返歌があったので)、「*あはずは何を(結ばれなくては意味がない)」と、恨めしげに眺めたまふ(と薫君は不満げに庭を眺め見ます)。　*「あはずは何を」は注に＜『源氏釈』は「片糸をこなたかなたによりかけてあはずは何を玉の緒にせむ」（古今集恋一、四八三、読人しらず）を指摘。＞とある。「かたいと」は撚り合せる片方の糸。「こなたかなたによりかけて」は手足を絡ませて、口を吸い、ホコをホトに収める、という情交そのものだろう。その限りでは、ある意味で結ばれてはいるわけだ。だから、この「あふ」は＜夫婦縁として結ばれる＞を意味する。「玉の緒」は数珠の通し紐でもあるが、「たま」は高価値、「を」は長い人生、を例えるので、此処の「玉の緒」は＜素晴らしい人生＞のことだ。しかし、男の性として、いや女の性としても、情交自体に相当な価値を思わない者はいないだろうから、この引歌の真意、また、是を引く薫君の真意も、どの辺にあるのかは不明だ。

みづからの*御上は(姫君が御自分のことは)、かくそこはかとなく*もて消ちて*恥づかしげなるに(このように何となく言い紛らして気が重そうなので)、*すがすがともえのたまひよらで(薫君は思い切って言い寄りなさることも出来ず)、*宮の御ことをぞまめやかに聞こえたまふ(匂兵部卿宮が妹君に御執心であることを親身に相談申しなさいます)。　*「おおんうへ」の「御」は姫君に対する敬称で、「みづからの御上」は＜姉姫自身の事柄＞ということらしい。ただ、この文の主語は薫君らしい。とても分かり難い。　*「もて消つ」は＜鎮める→目立たなくさせる→紛らす＞あたりか。　*「恥づかしげ」は＜恥ずかしそう、きまり悪そう→気が重そう＞あたりか。　*「すがすがと」は＜すらすらと滞りなく、さっぱりした気分で＞などともあるが、此処では「のたまひよる＝言い寄る」に掛かる副詞なので＜思い切って＞なのだろう。　*「宮の御ことを」は注に＜匂宮が中君にのご執心であることを。＞とある。

「さしも*御心に入る*まじきことを(そのように姫君がお返事なさらない程に、喪中にも関わらず御機嫌を損なう口説き文面を、兵部卿宮がお書きになったのは)、*かやうの方にすこしすすみたまへる*御本性に(風流ごとに傾きなさりがちな宮のご性格から)、聞こえそめたまひけむ*負けじ魂にやと(お手紙をお出しなさり始めた馴れ初めにこだわってのことで)、とざまかうざまに(喪中だからこそ落ち込まないように元気付けようとした、いろいろと季節感のある励ましかと)、*いとよくなむ*御けしき*見たてまつる(とても素晴らしく宮の御配慮を思い申し上げますので)、まことに*うしろめたくはあるまじげなるを(決して不遜ではないようなものなのに)、などかくあながちにしも(なぜこうも頑なまでに)、もて離れたまふらむ(宮をお避けなさるのでしょうか)。　*「みこころ」の「御」は妹姫への敬称なのだろう。となると、「さしも」は一般の強調副詞の＜然程には、然して＞という言い方ではなく、「さして」の「さ」は匂宮の手紙に姫が＜度々返事をしないこと＞を具体的に指す代名詞ということになる。薫君と匂宮の理解する所では、姫が返事をしなかったのは、喪中にも関わらず、匂宮が懸

想文を送って来たから、という論理筋のようだ。　*「まじきこと」とは匂宮の文面のことだろうが、それは下に「あるまじげなる」と言い換えているので、論理構造は＜匂宮の手紙は姫の気に入る「まじきこと」のようだが、それは誤解で、本当はそのようなものでは「あるまじげなる」ものなので＞という文意を示すことになり、「など」「もて離れたまふらむ」という問い掛けで結ぶ構文となっている。ということは、以下に誤解を解くべき説得が語られるので、「まじきことを」の「を」は「こと」に関して以下に叙述することを示す格助詞ではあるものの、その叙述が「まじき」という判断を覆す意図を持つ説得内容であることから、この「を」は結果として逆接の接続助詞語用の文意を持つ。と、それは同時に、「まじきこと」の「こと」が匂宮の手紙自体、その文面自体の＜こと＞を指すのではなく、そういう文面を匂宮が書いた＜理由＞という文意になるので、左様補語する。　*「かやうの方」は匂宮の手紙にあった贈歌などからして＜口説き歌＝懸想ごと＝風流ごと＞あたりか。　*「おおんほんじゃう」の「御」は匂宮への尊称らしい。「たまふ」の敬語遣いは、匂宮の行動を薫君が実際に見知っていることを示す、のだろう。姫の事に関しては、分かっている事実には「御」の尊称を付けるが、行動自体は薫君には見知り得ない事なので、姫には動詞をなるべく使わない言い方をしている、ように見える。　*「まけじだましひ」は＜負けん気。意地。＞なのだろうが、何も姫への対抗心ということではないだろう。恐らく是は宮自身へのこだわりで、いわば＜初志貫徹＞みたいなこと、だろうか。何も喪中だからって、湿っぽい話じゃなくて、明るく慰めよう、みたいな。そういう理屈じゃないと、匂宮の口説き文面が姫に対しての無礼ではない、という言い訳にならないように思える。で、「にや」の仮定可能条件は「とざまかうざまに(あらむ)と」と推論展開され、「御けしき」を説明する上文を受ける格助詞の「と」が前置されている、という変則文。　*「いとよくなむ」は「見たてまつる」を修辞するが、強調意で対象体の「御けしき」に前置される。　*「みけしき」は匂宮の＜御意向＞。　*「見たてまつる」は薫君の所見だろうが、この終止形は文末の結句ではない。結句の言い方なら、多分＜見たてまつりはべる＞の謙譲表現だ。この終止形は、「御心に入るまじきことを」に対する薫君の見解で、その見解によって下文の理由立てとしている構文なので、連体形の「見たてまつる」＋理由の格助詞「に」、に近い説明の助詞語用だ。　*「うしろめたし」は＜不安だ、気懸かりだ＞だが、匂宮が本気じゃないから＜不安だ＞というのは姫の乗り気を前提にした言い方になってしまうし、薫君の意図が此処では喪中なのに無礼だという筋だとすれば＜気に障る→不遜だ＞くらいの言い方になるのではないか。ただし、姫自身は匂宮には分不相応で気が引ける、という遠慮が先立っていたような語り筋も前にあったので、紛らわしいというか、何でこんな分かり難い言い方をするのか、と思う。それでも、此処から下の文は、この文全体の中では比較的分かり易い部分で、この部分の文意を頼りに全体の文意の見当を付けたほどで、確かに実際の会話では、言いたい事が先走って、通常の文型から見て変則な前置や助詞語用はあるし、それがその場では説得力を持つこともあるのだろうし、時に印象深い一言を敢えてそのままの言い方で示すという演出は多弁でさえあると思うが、発言全体の引用であればよほど丹念に場の再現がなされていないと観客はその台詞を理解できず、場の再現を省くなら、通常の文型に近づけた台詞に書き換えるべきだろうに、この発言文はそのどちらも加工されていないかの稚拙文に見える。

*世のありさまなど(男女が気持を通わし合う世の習わしを)、思し分くまじくは見たてまつらぬを(あなた様方がお知りでないとは思え申せませんが)、*うたて(最初から嫌がって)、*遠々しくのみもてなさせたまへば(ひどく遠ざけてばかりなさっていらっしゃると)、*かばかり*うらなく頼みきこゆる心に違ひて(このように心から求婚申し上げる誠意に反して)、恨めしくなむ(残念です)。ともかくも思し分くらむさまなどを(どのようなお考えなのか)、さはやかに承りにしがな(はっきりとお聞き申し上げたい)」　*「世のありさま」は注に＜男女の仲。＞とある。ただ、「男女の仲」というと主に＜情交関係＞を意味し、此処でも当然にその意味も含まれているだろうが、姫は実際には処女だろうし、情交や夫婦関係が話題というよりは、男と女が心を通わし合って睦み合うのは世間に普通にある事、といった文字通りの「世のありさま」という言い方なのだろう。　*「うたて」は＜むやみに、わけもなく＞という否定意の一

般副詞語用でも良さそうだが、「遠々し」が具体意を示す語用に見えるので、此処では、物事に直面したその場でそれ以上の相手の進行を防ぐ＜打ち立ち会ひて＞という拒否姿勢を表わす語感と考えて、警戒心や嫌悪感を示す言い方、と取って置く。　*「遠々し（とほどほし）」は「遠し」の強意で＜ひどく疎遠だ＞だろうが、強調だけなら「いと遠し」でも良さそうで、「遠々し」は具体事象を念頭に置いた実感が込もった言い方に聞こえる。　*「かばかり」は「宮の御ことをぞまめやかに聞こえたまふ」とあったものの、すっかり薫君自身の気持を匂宮の手紙に準えて姉姫に迫る言い方になっている。　*「うらなく頼む」は＜余念無く期待する→真心から求婚する＞。

と、*いとまめだちて聞こえたまへば（と薫君はとても真剣になって申しなさると）、　*「いとまめだちて」は先に「まめやかに聞こえたまふ」とあった薫君の他人事姿勢が、今や自分の真剣な話になっていることを示す副詞句。

「違へじの心にてこそは（御誠意に背くまいと）、かうまであやしき世の例なるありさまにて（こんな語り草になりそうな侘しい田舎暮らしながらも）、*隔てなくもてなし*はべれ（都人に習って出来るだけ早く失礼の無いように御返事申し上げておりますのに）、それを思し分かざりけるこそは（それがお分かり頂けないとは）、*浅きことも混ざりたる心地すれ（情けない限りです）。　*「へだてなく」は＜間を置かず＞だろうか、＜親愛を示して＞だろうか。「間を置かず」は、時間的に＜なるべく早く＞でもあり、上文をより直接に受ければ＜都に近づけて→都人の風習に習って＞だろうか。「親愛を示して」は、むしろ＜失礼の無いように＞だろうか。　*「はべれ」の已然形は下に「ば」の事情説明の接続助詞が省かれていて、此処句点でを結文とせず、読点で下文に続けたい。ただ、「はべり」は自動詞または丁寧語の補助動詞なので、是を命令形の言い切りで、責務の自覚表現と聞くことは出来そうだ。その語感を意図しての言い切りだとは思うし、だからこそ、下文では「それを」と代名詞で受けているのだろうが、そのように上文を受けているのだから、文意として下に続くことも、また自明だ。　*「浅きことも混ざりたる心地すれ」という言い方は、意外なほどに率直な、正面切っての姫の反論だ。姉としての責任感が此処まで言わせたか。であれば、こういう手応えが却ってたまらなく愛しく思えたりする、という男心まで計算してのものではなさそうで、其処が尚更抱きしめたい。

*げに（確かに本来は）、かかる住まひなどに、心あらむ人は、思ひ残す事、*あるまじきを（こういう侘び住まいに仏道修行の志がある人は風流ごとなどの世事への執着は無い筈なので）、何事にも*後れそめにけるうちに（私たち姉妹は何ごとにも都人には後れを取って至らぬままに育ちましたもので）、　*「げに」は薫君の発言を受けて、それに同意する言い方ではありそうだが、何処の何に同意しているのかが分かり難い。しかし姉姫は、薫君の説には今、反論したばかりだ。だから、是は薫君の発言内容への同意ではない。その「いとまめだちて聞こえたまへ」る薫君の質問姿勢に対して、それを真に受けて、此方も誠意を持ってお応え申しますという、問答をすること自体への同意だ。だから、この「げに」は＜中納言殿の仰るとおりに＞という上文を直接受けた個別意の言い方ではなく、「さはやかに」応答するに先立って、論理展開の初めに一般認識に照らして自分の立場を説明しようとする一般意の副詞語用だ。　*「あるまじき」は一般論だが、当然に薫君や匂宮に対する皮肉ないし非難の意は込められている。なお、「を」は順接の接続助詞というよりは、理由意の係助詞語用で下文を説明している、かと思う。　*「後れ染む」は＜至らないように育つ＞。

*こののたまふめる筋は（今の中納言殿が仰せになったような婚儀の話は）、*いにしへも（故父宮も）、*さらにかけて（全く一向に）、とあらばかからばなど（こういう場合にはこうするなどと）、行く末のあらましごとに取りまぜて（将来の見通し話にも結婚の事に付いては）、のたまひ置くこともなかりしかば（御遺言も無かったので）、なほ、かかるさまにて（私たちには、ずっと独身の

ままで)、世づきたる方を思ひ絶ゆべく思しおきてける(世間並みの幸せは諦めるようにとお考えだった)、となむ思ひ合はせはべれば(とのように思い当たりますので)、*ともかくも聞こえむ方なくて(お受けするとは、どのようにも、お応えの仕様もございません)。　*「この」は＜現下の話題の＝今の＞。「のたまふ」は話し相手の薫中納言に対する敬語。「筋」は話。今の中納言の話題は＜姉姫の結婚＞。　*「いにしへ」は、「往ぬ(いぬ、去る・居なくなる)」の連用形「往に」に、過去の助動詞「き」の連体形「し」が付いて、名詞「辺(へ、何処か・誰か)」を規定した語で、過ぎ去った昔や故人を示す。此処では故父宮。　*「さらに」は＜殊更特に＞。「かけて」は＜それに関して＞。で、「さらにかけて」は「のたまひ置くこともなかりし」という打消語に副詞語用されているので、二重否定の＜決して決して＝全く一向に＞という言い方。　*「ともかくも」は曖昧表現で、この＜何とも、どのようにも＞という語意自体には意味はない。姉姫自身の婚儀辞退意は「世づきたる方を思ひ絶ゆべく」「思ひ合はせはべれば」に示されている。で、「聞こえむ方なくて」の下には＜はべる＞や＜はべるべし＞などが、重複回避と共に曖昧な柔らかい言い回しとして省かれている。

*さるは(しかし)、すこし世籠もりたるほどにて(少し山里暮らしはしているものの)、*深山隠れには心苦しく見えたまふ人の御上を(このまま深山隠れには惜しくお見えになる妹君の婚儀は)、いとかく朽木にはなし果てずもがなと(古歌のような朽木にはさせたくないものと)、人知れず扱はしくおぼえはべれど(私は何とか事を運びたいと思っておりますが)、いかなるべき世にかあらむ(どんなものでしょうか)」　*「さるは」は＜しかしながら＞という接続詞だが、是は上文の話題を引き継ぎながら別視点での事情説明を展開する意を示す言い方で、別視点とは妹宮に関する事情ということのようだ。それならそれで、主語を＜君＞とか＜若宮＞とか明示すれば良いだろうに、相変わらずの主語省略とは相変わらず分かり難い。　*「みやまがくれ」の言い回しに付いては、注に＜『異本紫明抄』は「かたちこそ深山隠れの朽木なれ心は花になさばなりなむ」（古今集雑上、八七五、兼芸法師）を指摘。＞とある。

と、うち嘆きてもの思ひ乱れたまひけるほどのけはひ(と溜息混じりに思い悩んでいらっしゃるような姉姫の様子は)、いとあはれげなり(実に薫君には感じ入るものだったようです)。

［第三段　薫、弁を呼び出して語る］

*けざやかに*おとなびても(縁談を諦めた自分のこととははっきりと分けて、妹姫の婚儀を姉君として取り計らう点に於いても)、*いかでかは*賢しがりたまはむと(とてもしっかりと事をお運びにはなれないと)、*ことわりにて(この姉姫の世慣れぬ事情では縁談が進まないのも道理なので)、例の(例によって親代わりでもある)、古人召し出でてぞ語らひたまふ(伯母筋の老女の弁の君をお呼び出しなさって、薫中納言は姫君たちの縁談の相談を為さいます)。　*「けざやか」はナリ活用の形容動詞で＜際立っているさま。はっきりとしているさま。＞と大辞泉に語用説明がある。ところで、この形容意は何を対象としているのか。それは直上の姉姫の発言およびその態度に対してのものらしい。ということは、自分の結婚は諦めているが、妹姫の婚儀は何とか実らせたい、という意向と、姉姫自身にはその具体的な方策が無い、という事情と、その無力さを嘆く悲しげな姉姫の様子、に対しての形容、ということらしい。となると、この「けざやか」は自分と妹の事を＜はっきりと区別して考えていること＞になりそうだ。　*「おとなぶ」は＜年長者ぶる→姉らしくする＞。また、「ても」の「も」は状態を示す助詞「て」を強調する助詞で、逆接助詞ではないようだ。*「いかでかは」は反語表現で＜どうして～できようか→とても～できない＞。　*「さかしがる」は＜小賢しく振舞う。しっかり者の風をする。＞と古語辞典にあるが、それは「けざやかにおとなぶ」と既に語られており、此処では＜賢明な判断を下す＞くらいの意味でないと文意が通らない。「さかしがる」は＜賢しくあろうとする＞で、「さかし」は

元々＜優れている。賢い。＞だから、「がる」を悪意や揶揄でなしに好意的に解せば＜正しく判断できる＞ような語用は成立しそうだ。姉姫の判断対象は妹の結婚。しかし、薫君の興味は姫君たち緒二人の縁談であり、特に自分の相手には姉姫を、従って匂宮の相手には妹姫を、と想定しているようだ。　*「ことわりにて」は＜尤もなことなので＞という事情説明項のようだが、上文は姫の世慣れぬ事情を語っていて、それを＜尤もなこと＞と読んだのでは、「古人召し出づ」る理由にはならない。姫が世慣れぬことによって、縁談が進まないのが＜ものの道理なので＞、縁談を進めるために「古人召し出で」た、ということだろうから、左様に明示補語する。が、是は単に自明の結論を省語してあるのではなく、その先の事情まで読者に忖度させる書き方で幼児文だ。

「年ごろは(私は数年来)、ただ後の世ざまの心ばへにて進み参りそめしを(ただ後世に渡る悪い因果を絶ちたい出家心から進んで此方の山荘に通い慣れ申して来ましたが)、もの心細げに思しなるめりし御末のころほひ(何とも頼りなさげにお思いだったような八宮の御末期に)、この御事どもを(姫君たちの身の振り方を)、*心にまかせてもてなしきこゆべくなむのたまひ契りてしを(私の判断で御世話申すようにと仰り私も承って約束しましたが)、思しおきてたてまつりたまひし御ありさまどもには違ひて(故宮が御養育方針にお考え申し上げなさっていらっしゃった普通の娘らしさとは姫君たちは違っていて)、御心ばへどもの(御二人の結婚に対するお考えが)、いといとあやにくにもの強げなるは(それはとても困るほど後ろ向きで頑ななのは)、いかに(何故なのか)、思しおきつる方の異なるにやと(八宮が姫君の結婚相手にお考えだったのは私ではなかったのかと)、疑はしきことさへなむ(疑わしく思われるほどです)。　*「心に任す」は八宮が薫君を信頼して＜姫君の将来を薫君の判断に任せる＞という意味だ。結果として、薫君の気分次第に事が運ばれる事も有り得るが、八宮は薫君をそうした自分勝手な判断をしない人と見込んで娘の将来を託した、という経緯は前巻までに語られていた。そして、この経緯が実に微妙だ。八宮は薫君を信頼して姉姫との結婚を切り出した。が、その時点では、薫君は出家心から山荘に通っていた事情もあったし、出生の秘密を老女から明かされた厭世観もあって、責任を持って姫の生活の面倒を見るとは故宮に約束したが、結婚自体は引き受けなかった。で、そうなると、八宮は他に信頼できる貴人に心当たりが無かったので、姫君たちには、結婚という普通の女の幸せは諦めて、尊厳ある独身生活を送るようにと諭して、何とそのまま息を引き取ってしまった。その結果、薫君は姫の世話を託されて、姫は独身を守るように、とそれぞれが八宮に遺言された形になってしまった。で、薫君は面倒を見る心算で改めて姫の事を考えると、生前の八宮に話したのとは違って、姫を自分の女として妻に迎えたくなって来た。八宮存命中に薫君が結婚を引き受けていれば、八宮は姉姫に薫君との結婚を強く勧めただろうし、姉姫も父宮の意向には従っただろう。が、この行き違いは、八宮亡き今となっては修復の仕様がない。読者はこの事情を承知しているし、そういう経緯に基づいて、この薫君の発言を、その言葉に込められた意図の文意で読むことになる。で、恐らくは同じようにこの事情を承知していそうな老女に、薫君は姉姫と自分の結婚に付いて相談した、という場面と読むべきなのだろう。薫君は、姉姫と自分の結婚が叶えば、妹姫と匂宮との結婚は何とでもなる、くらいの気持だったか。

おのづから*聞き伝へたまふやうもあらむ(自然と聞き知りなさっているでしょうが)、いとあやしき本性にて(私は妙にクセのある生まれつきの気性で)、世の中に心をしむる方なかりつるを(男女の仲に本気になることは無しに来ましたが)、*さるべきにてや(是も因縁でしょうか、此方の姫君には)、*かうまでも聞こえ馴れにけむ(このようにまでも親しくお話し申す仲になっているのです)。　*「聞き伝へたまふやう」は何を指すのか。「あらむ」の推論仮定助動詞を受ける語句は「(に)けむ」という結論助動詞なので、「やう」は「かうまでも聞こえ馴れ」ていることを指し示す。したがって、「いとあやしき本性にて～さるべきにや」が挿入構文である事が知れる。　*「さるべし」は＜そうなる因縁にある＞という定句語用らしい。また、「にてや」という理由推考項は、「いとあやしき本性にて」の事情を知る弁の君ならではに訴え得る必然

意で、姫と自分との結婚に協力要請する言い方になっている。　*「かうまでも聞こえ馴れにけむ」の「聞こえ馴れにけむ」は＜親しく話す仲になっている＞という事象説明だが、「かうまでも」は「さるべきにてや」の必然意を受けて＜必ず結婚すべき者同士として＞を論理意とする巧みな言い回しとなっている。弁の君は、薫君と姫との情交の御膳立てを、ほとんど強要されているに等しい。

世人もやうやう言ひなすやうあべかめるに（世間の人も次第に私と姫君との仲を噂するようになりそうなので）、同じくは*昔の御ことも違へきこえず（どうせなら私がお聞き申した故宮の御言葉に背き申さず）、我も人も世の常に心とけて聞こえはべらばや（私も姫も世の常の男女の仲に心打ち解けて結婚し申せば良いのではないか）、と思ひよるは（と考えてみるのは）、*つきなかるべきことにても（以前の結婚を控えていた考えと違って、変なことを言い出すようだが）、さやうなる例なくやはある（そうした心変わりは良くあるものだ）」　*「昔の御ことも違へきこえず」は注に＜故八宮の遺言に違わず、の意。＞とある。が、この「おおんこと」を＜御遺言＞という客観的に認められたもののような言い方をしてしまうと、姫の方が父宮の遺言に背いているかの印象を与える文になってしまい、それは事実に反する。だから、不自然な補語になりそうだが、この「御言」は薫君が＜自分が聞いた故宮の言葉＞として置く。　*「つきなし」は＜不都合だ＞。だが、是は何に対しての判断か。薫君は昨年の初秋七月に山荘を訪れた際に、八宮から姫との婚意を打診され、それに対して、「世の中に心をとどめじと（出家を旨に、現世に執着しないように）、はぶきはべる身にて（妻子を儲けない身ですので）、何ごとも頼もしげなき生ひ先の少なさになむはべれど（何ごとも頼られ甲斐の無い将来性の少ない私ですが）、さる方にてもめぐらいはべらむ限りは（そんな風でも生きております限りは）、変らぬ心ざしを御覧じ知らせむとなむ思うたまふる（変わらぬ誠意をお示し申したいと存じます）」（椎本巻二章一段）と辞退していた。このことから考えれば、生前の八宮には辞退した姫との結婚を今さら言い出すこと、が不都合のようにも見える。また今は、弁の君と話しているので、不義の子である自分が王家の姫と結婚すること、が不都合だと薫君は言っているのかも知れない。が、下に「なくやはある」と広く知見されているかの「さようなるためし」に準えることとなると、心変わりは良くある事だが、不義の子という事情はやはり伏せられることなので広く知見されているとは考え難い。だから、故宮の打診を辞退した、という個別事情よりも、出家を旨に結婚を控えて辞退した、ということを翻意する、という意味で自分の心変わりを一般事情の＜不都合＞と薫君は言った、と取るのが平易な文意かと思う。と言っても、この平易な文意を得る為に、斯様に面倒なノートを要するとは、当時の人は本当にこれらの文を普通に読み進めたのだろうか。だとしたら、この帖で語られる各語に、当時ならではの定句化した、よほど限定的な意味の語法があって、当巻は当時の流行の最新現代語満載で書かれた文なのかも知れない。とにかく、今となってはか、当巻はまだほんの初端だというのに、難語・難文の塊だ。

などのたまひ続けて（など仰り続けて）、

「*宮の御ことをも（兵部卿宮との御縁談についても）、かく聞こゆるに（このように私がお勧め申しておりますのに）、うしろめたくはあらじと、うちとけたまふさまならぬは（姫君は宮を心配無いお相手と打ち解けなさる様子でないのは）、うちうちに（内々に別の誰かを）、さりとも思ほし向けたることのさまあらむ（結婚相手にお考えに違いない）。なほ、いかに、いかに（さあ、本当のところはどうなのですか）」　*「宮の御ことをも」は注に＜以下「なほいかにいかに」まで、薫の詞。「宮」は匂宮。匂宮と中君の縁談。＞とある。

とうち眺めつつのたまへば（と薫君が途方に暮れながら仰ると）、例の、悪ろびたる女ばらなどは（普通の品性の良くない女房たちならば）、かかることには、憎きさかしらも言ひまぜて（こう

いうことには意地悪な理屈を言い立てて)、*言よがりなどもすめるを(利口ぶったりするものらしいが)、いとさはあらず(弁の君は全くそのようなことはなく)、心のうちには(内心では)、「あらまほしかるべき御ことどもを(どちらも喜ばしい縁談なこと)」と思へど(と思うが)、　*「ことよがる(言好がる)」は大辞泉に＜言葉巧みに言う。体裁のよいことを言う。＞とある。文脈からすると、この「ことよがり」は＜利口ぶる＞あたりに見える。

[第四段　薫、弁を呼び出して語る（続き）]

「もとより(姫君たちは元々)、かく人に違ひたまへる御癖どもにはべればにや(このような山住みで都人とは違う御性格でいらっしゃるので)、いかにもいかにも(どのようなことにせよ)、世の常に何やかやなど(普通の人にあるような何やかにやの縁談など)、思ひよりたまへる御けしきになむはべらぬ(お考えになる様子などございません)。

*かくて、さぶらふ*これかれも(このように現在お仕え申している私や他の女房たちも)、*年ごろだに(長年勤めたからといって)、何の*頼もしげある木の本の隠ろへも*はべらざりき(何の頼りになりそうな大樹の庇護もないのです)。　*「かくて」は主人の八宮亡き＜現在もこのように＞なのだろう。「さぶらふ」も現在活用のままだ。　*「これかれ」は＜誰彼＞と訳文にあり、古語辞典にも＜あれこれ＞とある。が、私はこの「これ」を弁自身のことの＜私＞と読んでみたい。　*「年ごろだに」の限定の副助詞「だに」は、ここでは「はべらざりき」に係る条件項提示の係助詞語用かと思う。だから、「しも」とは言わないのだろう。したがって、これは八宮存命中の労務待遇の話ではなく、没落貴族ゆえに退職金なり遺贈品なりが全く期待出来ないという現状の話だ。が、そんなことは分かっていたことで、それが為に失脚に伴って多くの女房や郎党が転職したことは橋姫巻一章二段などに語られていた。それでも、弁の君は当面は此方に仕えるしかない事情の者だったのであり、つまりは、これは今さらながらの愚痴であり、心底の本心というよりは、体裁を繕わないという一種の親しさの表現だ。*「頼もしげある木の本の隠ろへ」は注に＜『河海抄』は「侘び人のわきて立ち寄る木のもとは頼む蔭なく紅葉散りけり」（古今集秋下、二九二、僧正遍昭）を指摘。＞とある。より私に馴染みのある言い回しは「寄らば大樹の陰」で、この出典は分からないが、漢詩だろうか。で、これは多くの場合に＜頼りになるのは大企業＞の意味で語用しているようだが、それは「大樹」を＜大組織＞に準えて、大勢に靡く人を「寄らば大樹の陰か(自分でものを考えずに人任せにするのか)」と揶揄するもので、必ず「か」と本義に準えている事を示す批判意の副助詞を付けて語用するが、「寄らば大樹の陰」自体の本義は恐らく、共同体集落の象徴となる実物の大木の下に集う自治精神に基づく和みなのではないか、と夢想する。　*「はべらざりき」の「き」は過去の助動詞の終止形、と説明されることが多い。が、過去認識を示す助動詞は「ぬ」「つ」「けり」「たり」「り」などもあり、「き」は本人認識による断定語用らしく、であれば、いくら断定であっても本人証言には客観性がないので、それはあくまで、事実の一面を示していそうな関係者の確定判断であり、確かに過去の経験に基づく判断ではありそうだが、その断定語用は現在時点での当人の事実認識を示している、に過ぎないとも言える。しかも是は発言文であり、過去事実を説明報告する叙述地文ではないのだから、話し手が確定認識を表明している論理語用と読むべきだろう。ついでに言えば、現代語の「ありき」は正しくこの論理語を引き継いでいる、かと思う。そういえば、「～ざりき」も＜～ずありき＞だ。

身を捨てがたく思ふ限りは(故宮への奉仕でお勤めを終える気の無い者にあっては)、ほどほどにつけてまかで散り(その出身身分に応じて別の奉公先に移り散って)、*昔の古き筋なる人も、多く見たてまつり捨てたるあたりに(昔の幼い時に縁があった乳母たちでさえも、その多くがお見捨て申し上げた形になっていた姫君たちを)、まして今は(まして八宮亡き今となっては)、し

ばしも立ちとまりがたげに*わびはべりて(僅かな間でも居残るのを嫌がるように厄介がって)、 *「昔の古き筋なる人」は注に＜『集成』は「昔からの古いご縁故の人々も。宮家に代々奉公してきたゆかりの者たち」と注す。＞とある。が、「代々奉公してきたゆかりの者たち」では、私には文意が解せない。この「昔の古き筋なる人も多く見たてまつり捨てたる」は「まして今は」に掛かる八宮存命中の事情説明であり、構文としては主語が「身を捨てがたく思ふ限り」のままに続く文の挿入句だろうから、「古き筋」は故宮の縁者ではあるかもしれないが、むしろ＜「あたり」＝姫君たち＞に近い筋、とは即ち＜姫の乳母たち＞なのではないか。橋姫巻一章二段には「若君の御乳母も、さる騒ぎに、はかばかしき人をしも、選りあへたまはざりければ、ほどにつけたる心浅さにて、幼きほどを見捨てたてまつりにければ、ただ宮ぞはぐくみたまふ」という記事もあった。　*「侘ぶ」には古語辞典に拠ると＜困る。当惑する。迷惑に思う。＞という語用があるようで、この場面では＜迷惑がる→厄介がる＞と読んで置く。

『*おはしましし世にこそ(宮様のご存命中であれば)、*限りありて(王家とは身分差があるので)、かたほならむ御ありさまは(臣下身分の貴人との不釣合いな御結婚は)、いとほしくもなど(好ましくないなどと)、古代なる御うるはしさに(伝統ある御格式からして)、思しも*とどこほりつれ(お思いになって話が進まなかった、ということもあったでしょう)。　*「おはしましし世にこそ」は注に＜以下「行ひなすなれ」まで、よからぬ女房の意見。係助詞「こそ」は「とどこほりつれ」に係る。係結び、逆接用法。＞とある。にも関わらず、自分の発言中に他者の発言を引用する二重括弧の校訂が何故か施されていない。折角の尤もな注説が生きていない。不思議だ。　*「限りありて」は注に＜宮家としての格式があって。＞とある。が、「限り」は＜制限。限度。＞だから、これは＜臣下身分には限度がある→王家とは身分さがある＞という言い方かと思う。　*「滞りつれ」の已然形は注に＜「逆接用法」で下に続く＞ように説明があったが、以下の文も＜こそ～已然形＞の主張文型が続くので、一項目ごとの文意の分かり易さを期して此処で文落して置きたい。「こそ」文型でなければ＜滞りつるにあらむ＞くらいだろうか。

今は、かう(今はこうして)、また頼みなき御身どもにて(他に頼る人がいない御事情の姫君たちなので)、いかにもいかにも(どのような身分の相手とでも)、*世になびきたまへらむを(浮世の情に流されなさっていて当然なのものを)、*あながちにそしりきこえむ人は(偏にそうした縁談を非難申そうという人は)、かへりてものの心をも知らず(却って物の道理を知らず)、言ふかひなきことにてこそはあらめ(無用な空論です)。　*「世になびく」は＜俗世の男女仲に同調する→情趣に流される＞。「たまへらむ」は、尊敬の助動詞「たまふ」の場面想定語用の語尾変化の已然形「たまへ」に、完了の助動詞「り」の状態説明の語尾変化の未然形「ら」が付いて、さらに当然意の評価助動詞「む」の連体形「む」が付いたもの、で＜(姫君が)～なさっていて当然なもの＞という言い方。　*「あながちにそしりきこえむ人」は、八宮が生前に姫たちに諭していたことだが、敬語遣いもないし、今となっては弁自身のことなのかも知れない。

いかなる人か、いとかくて世をば過ぐし果てたまふべき(誰がそんなことで暮らしが立ちなさるでしょう)。松の葉を*すきて勤むる山伏だに(粗食に耐えて山籠もりの精神集中で仏道修行をする山伏でさえ)、生ける身の捨てがたさによりてこそ(あまりのひもじさで、生身の辛さの耐え難さによって)、仏の御教へをも(仏典の御教条までを)、道々別れては行ひなすなれ(各派に分かれて解釈するようです)』、　*「すく」は注に＜「すく」は飲み込むこと。松の葉を食べて修行をする山伏でさえ生身の体は捨てがたいので、の意。＞とある。

などやうの、*よからぬことを聞こえ知らせ(などのような王家の誇りを尊ばない下世話な話をそうしたよからぬ女房が聞かせ知らし申して)、若き御心ども乱れたまひぬべきこと多くはべる

めれど(姫君たちが世慣れぬ御心を乱しなさりそうなことが多くございますようですが)、*たわむべくもものしたまはず(姉姫は誇りを挫かれなさることもなく)、中の宮をなむ(妹姫のことを)、*いかで人めかしくも扱ひなしたてまつらむ(何とか王家の尊厳を持った形で人並みの結婚をさせて差し上げたい)、と思ひきこえたまふべかめる(と思い申しなさっていらっしゃるようです)。
*「よからぬことを聞こえ知らせ」は注に＜『完訳』は「宮家の品格を損うような意見」と注す。＞とある。確かに、「よからぬ」は弁の君の価値観から見た愚劣な女房の＜間違った判断＞のようなので、文意を確認したくなって、その中身まで立ち入って客観表現を加えたくなる。私も「よからぬ」のままでは気分が落ち着かず、その中身の社会的意味を＜王家の誇りを知らない半端者＞とみて左様補語するが、同時に、弁の君が「よからぬ」と思っていたことも示したいので、全体に意訳表現を取る。　*「たわむべくもものしたまはず」は注に＜主語は大君。＞とある。確かに、文脈からすれば＜姫君たち＞が主語に見えるし、文意から逆に是が＜姉姫だけ＞のことと分かる、という分かり難い主語省略だ。「たわむ」は＜ゆるむ＞というよりは＜圧力を受けて変形する＞ような語感らしい。つまり、王家の誇りが歪められる→誇りが挫かれる、くらいの言い方なのだろう。　*「いかで」は「人めかし」の実現の願望を示す修辞副詞ではなく、文脈から＜王家の誇りを守りたい＞という姉姫の意思が内意されている全般意の副詞語用で、「人めかし」は「人めかしくも」と「しく」の連用体言に付く「も」の係助詞で其自体が強く目的語指摘されている。

かく山深く訪ねきこえさせたまふめる御心ざしの(このようにあなた様が山深くお訪ね申し下さる御心向きの)、年経て見たてまつり馴れたまへるけはひも(何年も姫君たちを親切に御見舞下さる為さり方も)、疎からず思ひきこえさせたまひ(姫君は迷惑がらず素直に感謝申しなさって)、今はとざまかうざまに、*こまかなる筋聞こえ通ひたまふめるに(今は姫君お二人でいろいろな形の縁談を相談なさっていらっしゃるようで)、かの御方を(姫君は妹君を)、*さやうにおもむけて聞こえたまはば(あなた様が妻に迎えたいと申し込みなさるなら、お受け申しなさりたい)、となむ思すべかめる(とのようにお考えのようです)。　*「こまかなり」は＜こまごましている→細部まで気配りがある→親密だ＞で、「こまかなる筋」は＜親密な話＝縁談＞。　*「さやうにおもむけて」は注に＜『完訳』は「中の君を薫と結婚させたいと、大君は望んでいるとする。大君自身、自らは独身と決め、中の君を「深山隠れ」の「朽木」にはしたくないと、薫にも語った」と注す。＞とある。「聞こえたまはば」は下に＜よからむ＞などが省かれているのだろう。

宮の御文などはべるめるは(兵部卿宮の御手紙などございますようなのは)、さらにまめまめしき御ことならじ(決して本気の申し込みではあるまい)、とはべるめる(とお考えのようです)」

と聞こゆれば(と弁の君は薫中納言に姫君の実情を申し上げると)、

「あはれなる御一言を聞きおき(故宮からは私を御信頼下さり姫君の御世話を申し付かるという、感じ入る御言葉を聞き置きまして)、露の世にかかづらはむ限りは(私がこの無常の世に生ある限りは)、聞こえ通はむの心あれば(御見舞申し上げようと存じますので)、いづ方にも見えたてまつらむ、同じことなるべきを(どちらの姫君を妻にお迎え申し上げようと身内の縁を結ぶことに変わりはなく)、さまではた、思しよるなる(姫が妹君と私との結婚ということまでもお考えになっていらっしゃるのは)、いとうれしきことなれど(大変光栄ですが)、心の引く方なむ(私が心引かれる姫は)、*かばかり思ひ捨つる世に(私が不義の子だと言う、これほどに遣る瀬無い事情であっても)、なほとまりぬべきものなりければ(それでもなお諦め切れないものなので)、改めてさはえ思ひなほすまじくなむ(それを変えてそのように考え直すことは出来ません)。世の常

になよびかなる筋にもあらずや(八宮の縁で知り合えた姫なれば、普通の男女の色恋沙汰とは違う話かと思います)。　*「かばかり」は、自分が不義の子だという＜遣る瀬無い事情＞を、相談相手が弁の君だからこそ、何とか汲んで善処して欲しい、という薫君の計算に聞こえる。自分が不義の子ではないかという疑いから、薫君は物心付いた時から厭世気分が抜けず、それが為に八宮の隠棲生活に憧れ、この宇治山荘に通う内に姫と知り合うことになった。其処に運命を感じずには居られない。薫君は、その文脈で「世の常になよびかなる筋にもあらずや」と言っているのだろう。

ただかやうにもの隔てて(このような物越しのままの対面で)、こと残いたるさまならず(言い残しがあるような形ではなしに)、さし向ひて(直に会って)、とにかくに定めなき世の物語を(いろいろと考えようもある婚姻の相談を)、隔てなく聞こえて(率直に話して)、つつみたまふ御心の隈残らず*もてなしたまはむなむ(本心を打ち明けなさらない姫に思い残しがないようにして頂きたいのです)。　*「もてなしたまはむなむ」は注に＜仮定の気持ち。係助詞「なむ」は「疎かるまじく頼みきこゆる」に係る。＞とある。が、それは曲解だろう。「もてないたまはむ」の対象体は「みこころのくま(姫自身の御遠慮)」であり、それを「残らず(無いように)」という状態目的語に対して述辞されているので、「持て成す」の他動詞は実質で姫自身の自動詞を文意しており、薫君が「頼みきこゆる」目的語に成り得ない。などと、為にするような言葉を弄すまでもなく、「疎かるまじく頼みきこゆる」は下文の「いとさうざうしくなむ」を受けると注記されていて、是はちょっとした混乱での誤注らしい。此処の「なむ」は、むしろ上文の「世の常になよびかなる筋にもあらずや」に続けて、「さし向ひて」話せるように弁の君に計らって欲しいと迫っている言い方で、下に＜思ひはべる＞などが省かれているのだろう。そして、下文の「疎かるまじく頼みきこゆる」のは、姫が「もてなしたまはむ」ことをではなく、弁の君が＜取り計らうこと＞に正当性というか、「なよびかなる筋にもあらず」の多面的な説明を意図して、弁の君に姫と間近で会えるよう善処を促しているものだ。

*兄弟などのさやうに睦ましきほどなるもなくて(兄弟などの身内血縁に然程には親しい人も居なくて)、*いとさうざうしくなむ(とても寂しいので)、世の中の思ふことの、あはれにも、をかしくも、愁はしくも、時につけたるありさまを(日頃思う悲しみも面白さも悩みも、折々にありながら)、心に籠めてのみ過ぐる身なれば(話し相手も無いままに暮らしている私であれば)、さすがにたつきなくおぼゆるに(さすがに空しい気がして)、*疎かるまじく頼みきこゆる(姫とは親身に話せるように取り計らって欲しいものです)。　*「兄弟(はらから)」は＜同腹兄弟＞の意味らしい。異腹兄弟なら、薫君には明石中宮という姉君がいて、源殿という兄君がいる。が、むしろ、話し相手は薫君の実の父君が故衛門督藤原君だという事情を知る弁の君なので、薫君は本当に＜兄弟がいない＞という寂しさを訴える効果を狙って、こういう言い方をしたのだろう。また実際に、子供ほども年の離れた弟に、源殿も中宮も同世代人の親近実感は無いだろう。　*「いとさうざうしくなむ」は注に＜係助詞「なむ」は「疎かるまじく頼みきこゆる」に係る。＞とある。　*「疎かるまじく頼みきこゆる」は注に＜大君に親しくしていただきたいと期待申し上げている、意。＞とある。確かに、そういう言い方をしているように見えるが、実情としては、姫の寝所の御膳立ては女房が取り計らうので、薫君は正に弁の君を説得している、と読んで置く。

*后の宮、はた(姉上の皇后となると、この上ない御身分なので)、なれなれしく(とても気安くは)、さやうにそこはかとなき思ひのままなるくだくだしさを(そのような取留めのない気ままな無駄話を)、聞こえ触るべきにもあらず(申し上げ煩わせるべきではありません)。　*「きさいのみや」は注に＜明石中宮。表向き薫の異母姉。＞とある。薫君がこの人引き合いに出すのは、気安くは接しられないと、

皇后の身分の高さを言いながら、それを姉に持つ自分の身分の高さも示していて、姫の相手に資格十分だと言っているようにも聞こえる。

*三条の宮は(母上の三条宮は)、親と思ひきこゆべきにもあらぬ*御若々しさなれど(親と思い申し上げるに相応しからぬほどの御若々しさだが)、*限りあれば(親子の分際がありますので)、たやすく馴れ*きこえさせずかし(無遠慮にお話し申せませんので)。　*「さんでうのみや」は注に＜薫の母女三の宮。前年に三条宮邸は焼失して現在は六条院に住んでいるが、本来の呼称でよぶ。＞とある。確かに興味深い注で、三条宮が広く認知された名称なら、こういう呼び方は自然なのかも知れないが、この人を引く事自体が、自分が宮腹の子であるという主張ではあるのだろう。　*「おおんわかわかしさ」は＜子供っぽさ＞の語感。因みに、薫中納言は24歳で、兄の源大臣は50歳と如何にもの親世代であり、明石中宮は43歳、その夫の今上帝は45歳、その今上帝の妹宮であり、薫君の母君である三条入道宮も45歳ほどと思われるが、入道宮の天性の子供っぽさは、不義の子を産んでも変わらないとなると、言ってみれば無責任体質だが、そういう人は居るし、誰にでもそういう部分はありそうだし、確かに日常の社会生活は各個が信頼に足る責任を果たすことで維持されているのが基本原理のようではあるが、何が起こるか分からない世界で、どういう多様性が有効かは、実は結果論だ。　*「限りあれば」は注に＜『集成』は「親子の分がありますので」。『完訳』は「皇女で、出家の身という制約」と注す。＞とある。わざわざ親らしからぬと前振りがあるのだから、「親子の分」が話題かと思う。　*「きこえさせずかし」は、「きこえさす」が謙譲の丁寧語助動詞の＜申し上げる＞で、その未然形「きこえさせ」に打消しの論理助動詞「ず」が付いた＜申し上げられない＞という終止形で結論した上文意を、「か」と一度客観視して、その論旨を場の共通認識であるような体裁を繕い、その上で「し(然り、正しい)と確認した言い方で、結果として＜～なので＞という説得意を示し、本題の＜薫君が姫と「隔てなく聞こえ」る＞為の、仮主題である「睦ましきほどなるもなくて」という事情の理由説明を意図している。

*その他の女は、すべていと疎くつつましく(その他の高家の女は誰も全く親しみがなく気恥ずかしく)、*恐ろしくおぼえて(近寄り難い気がして)、心からよるべなく心細きなり(心から寛げる人が居なくて寂しいのです)。　*「そのほかのをんな」は注に＜姉や母以外の女性はすべて馴染めず気後れして恐ろしい、という薫の女性観。＞とある。ただ、此処で薫君が言う「をんな」は自分が娶るに相応しい王家筋か藤原摂関家の女であり、それこそ、その他の妻にすべきでもない身分の低い女たちは最初から本気で相手にしていない、ただの遊び女だと言っているに等しい。いや、それが実相であり、常識だったのだろう。　*「おそろし」は＜恐い＞というよりは＜畏れある→馴染めない＞のだろう。

*なほざりのすさびにても(その場限りの情痴ごとにしても)、*懸想だちたることは、いとまばゆく*ありつかず(恋心を打ち明けるような口説き文句はとても恥ずかしくて性に合わず)、はしたなきこちごちしさにて(みっともない不器用さで)、まいて心にしめたる方のことは(まして本気の恋心は)、うち出づる*ことは難くて(言い出すのが難しいけれども)、*怨めしくもいぶせくも思ひきこゆるけしきをだに見えたてまつらぬこそ(姫の拒絶を残念にも不可解にも思い申している私の心中を、姫にお知らせ申し上げないのは)、我ながら限りなく*かたくなしきわざなれ(我ながらあまりに馬鹿げています)。　*「なほざりのすさび」は身近な女房相手の欲情に任せた日常の性処理で、女を抱くということでは情事だが、是は使用人を呼び付ける類の一方的な主従関係で、それでも其れなりの盛り上げとして、その場限りの風情事はするが、家格を掛けた組織体制同士の契約ではなく、従って、その腹を探る情緒遊びという情報交換の切実さも重さも期待も挫折も喜びも悲しみも不要の真似事遊びに過ぎない。が、真似事だけに気楽に心置きなく性戯を楽しめるということはあるだろうし、腹の探り合いよりも、実際に権力のある男の、そ

れも色気のある男の器量に惚れて、そういう男に抱かれることに女冥利を感じることもあるだろう。玉の腰はあるし、逆玉もあってこその浮世の彩りに違いない。家柄と権勢で全てが決まるなら、情緒遊びも答えの決まった儀式をこなしているだけの意味しかない。いやしかし、その情報戦での駆引きに未来が係っているという、答えが決まっていない不確かさを超えるものは、その読みという判断感性を含んだ互いの相性だから、やはり本気の醍醐味に勝る人生は無いのかも知れない。　*「けさうだつ」は＜色恋めく＞とあるが、「懸想だちたること」は本気の恋文というよりは＜情緒めかした遣り取りの気取った恥ずかしさ＞のようだ。　*「ありつく」は＜物事が収まる→収まりが良い→似合う→性に合う＞ようなことらしい。　*「ことはかたくて」の接続助詞「て」は逆接でないと文意が通らない。*「怨めしくもいぶせくも思ひきこゆるけしき」は薫君が姫の拒絶を思う気持ちで、「けしき（気色）」は＜心中＞のことらしい。　*「頑なし」は＜頑固だ、偏屈だ→見苦しい→愚かだ＞という言い方らしい。

宮の御ことをも（兵部卿宮についても）、さりとも悪しざまには聞こえじと（いくらなんでも私が悪いように取り計らい申す筈はないだろうと）、まかせてやは見たまはぬ（任せてみては下さいませんか）」

など言ひゐたまへり（などを薫中納言は言っていらっしゃいました）。

老い人、はた（弁の君のほうも）、かばかり心細きに（これほど心細い境遇なので）、あらまほしげなる御ありさまを（この上ない中納言殿の御威風を）、いと切に（本当に切実に）、さもあらせたてまつらばやと思へど（姫の結婚相手であって頂きたいと思うが）、いづ方も*恥づかしげなる御ありさまどもなれば（姫は御二人共に縁談に後ろ向きな御様子なので）、思ひのままにはえ聞こえず（思った通りには姫君たちに薫君の御意向をお勧め申し上げられませんでした）。　*「恥づかしげなる御ありさまども」は＜照れ屋＞というよりは＜誇り高い←気安く縁談を持ち掛けられない＞みたいな意味に見えるが、語感と語意が馴染むようには、どう言い換えて良いか分からない。

［第五段　薫、大君の寝所に迫る］

*今宵は泊りたまひて（薫の中納言殿は今宵は山荘にお泊りになって）、*物語など*のどやかに聞こえまほしくて（自分たちや兵部卿宮と妹姫との縁談についてじっくりと姫とお話し申す心算で）、やすらひ暮らしたまひつ（ゆっくり過ごしていらっしゃいました）。　*「今宵は泊りたまひて」は主語が薫君らしい。「今宵は」の限定の係助詞「は」が＜客人がこの山荘に＞を内意し、「泊りたまひて」の敬語遣いが薫中納言である事を示す、ということなのだろうか。弁の君から話題主体が変わるのだから、紛らわしさを避ける為に主語は明示すべきだろうに、全くこういう主語省略には慣れない。　*「ものがたり」は＜そのことについての話＞であり、「そのこと」とは＜縁談＞だ。　*「のどやか」は＜のんびりと、ゆっくりと＞という形容動詞のようで、急がずに落ち着いて切迫感なく時間をかけるさま、を言うようだが、寛いで休む事が主眼の場合と、納得を得る事が主眼の場合とがあるようで、此処では後者だろうから＜じっくりと＞くらいの言い方なのだろう。

あざやかならず、もの怨みがちなる*御けしき（はっきり不快を示してはいないが、何となく不満そうな中納言殿の御態度が）、やうやう*わりなくなりゆけば（次第に重荷になって来て）、わづらはしくて（面倒なので）、*うちとけて聞こえたまはむことも（親しくお話し申し上げるのも）、いよいよ苦しけれど（姉姫にはますます辛いことだったが）、*おほかたにてはありがたくあはれなる人の御心なれば（生活全般に於いて助けとなる親身な世話を焼いてくれる中納言殿の御所望

なので)、こよなくももてなしがたくて(丸で素気無くは応対できず)、対面したまふ(姫は薫君と対面なさいます)。　*「みけしき」は薫君の態度のことらしい。とても分かり難い。主語や対象体や目的語などの省略は本当に読みずらい。　*「わりなし」は元々は＜理由が無い、分からない＞ということだろうが、その訳の分からなさが＜無闇、矢鱈→非常に＞であったり、其自体が＜無理なこと、仕方のないこと、困ったこと、辛いこと＞であるという言い方にもなるようだ。　*「うちとけて聞こえたまはむ」は注に＜主語は大君。＞とある。文意からはそうらしいと思えるが、とても分かり難い主語省略だ。　*「おほかたに」は＜大体は、およそ、全体に＞みたいな言い方だが、是は「御心(この日の薫君の意向)」ではなく「人(面倒を見てくれている薫君)」に掛かる修辞副詞だ。

*仏のおはする中の戸を開けて(仏像が正面を向いていらっしゃる南廂側の襖戸を開けて)、*御燈明の火けざやかに*かかげさせて(供養等の灯りを明るく燃やさせて)、簾に屏風を添へてぞおはする(姫は仏間で簾を下げて屏風越しに中納言に対座なさいます)。　*「仏のおはする中の戸を開けて」は注に＜仏間と廂間の隔ての中の戸。仏間は母屋の西面にある。大君は仏間にいる。＞とある。　*「御燈明」は「みあかし」と読みがある。「みあかし」は＜神仏の前に供える灯火。おとうみょう。＞と大辞林にあり、単に室内灯の油なのではなく、仏壇に供える灯りなので、故宮への供養の意味であり、また故宮の御前なので中納言に間違いの無いように戒める意味も込めているのだろう。　*「かかぐ(掲ぐ)」は＜高く上げる＞でもあるが、油火の場合は＜灯芯を長めに出して明るく燃やすこと＞を言うらしい。

*外にも大殿油参らすれど(御簾外の廂間にも部屋灯りをお持ちするが)、「*悩ましうて無礼なるを(疲れて失礼ながら横になっていますので)。あらはに(顕わになる灯りは御遠慮申したい)」など諫めて(などと制して)、かたはら臥したまへり(薫中納言は暗がりで半身で寝そべっていらっしゃいました)。御くだものなど(姫は中納言に菓子類などを)、わざとはなくしなして参らせたまへり(さりげなく持て成し申していらっしゃいました)。　*「外(と)」は注に＜母屋から見た外、薫の居る西の廂。＞とある。ただ、西廂はこの夏に薫君が襖の鍵穴から姫君たちを覗き見た部屋(椎本巻五章五段)だが、今は南廂の西側に居るかと思う。　*「悩ましうて無礼なるを。あらはに」は注に＜薫の詞。「無礼」は男性詞。＞とある。「なやまし」は＜気分が悪い。体調が優れない。＞でもあるが、単に＜疲れた＞でもあるようだ。「無礼(むらい)」は＜礼を失する＞だが、此処では＜失礼ながら横になる＞ということらしい。

御供の人びとにも、*ゆゑゆゑしき肴などして出ださせたまへり(姫は中納言の供人にも秋らしい趣向の酒肴などで持て成しなさいました)。*廊めいたる方に集まりて(供人たちは中門廊の侍所に集っていて)、*この御前は人げ遠くもてなして(この寝殿前には近付かないようにしていたので)、しめじめと物語聞こえたまふ(中納言殿は姫に物静かにお話し申し上げなさいます)。うちとくべくもあらぬものから(姫は気を許した馴れ馴れしい気配で有る筈もないものの)、なつかしげに愛敬づきて(優しげに好意的で)、もののたまへるさまの(ものの仰り方が)、なのめならず心に入りて(常ならず心に沁みて)、思ひ焦らるるも*はかなし(薫君は恋心に思い焦がれるものの、姫の拒絶の前には空回りです)。　*「ゆゑゆゑし」は＜趣向ある＞ということらしい。此処では、私には季節の趣向以外は思い付かない。「さかな」は＜酒肴＞。　*「廊めいたる方」は＜廊下の方の部屋＝侍所＞と読んで置く。*「この御前は人げ遠くもてなして」は注に＜薫と大君の周辺。『完訳』は「供人たちが気を利かす」と注す。＞とある。となると、「もてなして」の「て」は事情説明の接続助詞になりそうだ。　*「はかなし」は注に＜『評釈』は「ふとくずれては他愛もない人の心、と、自嘲めくことばである」。『全集』は「薫の自嘲とも語り手の評言ともとれる」。『完訳』は「現世離脱を身上としてきた薫の変化を、語り手が評して結ぶ体」と注す。＞とある。ということは、「おもひいらるるも」の「も」を可能推論の係助詞と読んでいるらしい。が、この文を単純に場面描写と見て、その状態の

まま下文に続く文脈と読むなら、この「も」は逆接の接続助詞で、「はかなし」は＜このままではどうにもならない空しい思い＞と言っているようにも見える。で、そういう薫君の内心に沿った地文と取って置く。

「かくほどもなきものの隔てばかりを*障り所にて（この屏風などのどうとでもなる物の仕切りに過ぎないものを犯せないものと畏れ入って）、おぼつかなく思ひつつ過ぐす心おそさの（言い寄りもせずに、中途半端な気持のままに過ごしてきた呑気さの）、あまりをこがましくもあるかな（あまりに愚かしくあったことだ）」と思ひ続けらるれど（と中納言は悔いが尽きないが）、*つれなくて（表情は変えずに）、おほかたの世の中のことども（八宮亡き後の世の中の全体の動向などを）、あはれにもをかしくも（時に悲しく、時に楽しく）、さまざま聞き所多く語らひきこえたまふ（いろいろと興味深く語り合い申しなさいます）。　*「さはりどころ」は＜障害物＞でがあるだろうが、語感には＜差し障りがあるもの→穢れに触るもの→畏れ入るもの＞があるように思う。 *「つれなし」は＜気持の動きに連れて顔色を変えること無しに→表情や態度を変えずに＞。

内には（御簾内の姫にあっては）、「人びと、近く（女房たちは近くに控えていなさい）」などのたまひおきつれど（など言い付けなさっていらしたが）、「さしも（そのような女房取次で）、もて離れ*たまはざらなむ（余所余所しく為さらないで欲しい）」と思ふべかめれば（と中納言が思っているようなので）、*いとしも護りきこえず（弁の君はそのようには姫をお守り申さず）、さし退つつ（さししぞきつつ、あえて下がって）、みな寄り臥して（女房たちは皆一様に横になって）、仏の御燈火もかかぐる人もなし（仏壇の供火も掻き灯しに来る者も居ません）。ものむつかしくて（姫は困って）、忍びて人召せど（そっと人をお呼び出しなさったが）、おどろかず（起きて来る者は居ません）。　*「たまはざらなむ」の主語は薫君なのだろう。「思ふ」は敬語遣いが無いので主語が女房のようにも見えるが、これは「思ふべし（思っているだろう）」という事態を客観事象視した論理語用ゆえの敬語省略だろうし、「べかめり」の「めり」が女房たちの判断の丁寧語に聞こえる。ただ実際に、このように中納言の意向を忖度するのは、女房たちというよりは弁の君であり、実質で親代わりを務めている弁の君の判断と計らいで、他の女房たちは其に従った、という文脈だろう。　*「いとしも」は＜甚くそのようには→然程には＞ではないらしい。「しも」は下に打消しを伴って＜必ずしも～でない＞という言い方の副助詞語用があり、「いと」はその語用の強調であり、「いとしも」でほぼ成句の副詞語用で＜少しもそのようには～しない＞という言い方なのだろう。主語は弁の君と読みたい。

「心地のかき乱り（気分が落ち着かず）、悩ましくはべるを（疲れてきましたので）、ためらひて（休んでから）、暁方にもまた聞こえむ（明け方にもまたお話し申しましょう）」

とて（と言って姫は）、入りたまひなむとするけしきなり（御部屋に下がりなさろうとする様子です）。

「山路分けはべりつる人は（山道を分け入ってきた私は）、ましていと苦しけれど（もっと疲れて苦しいが）、かく聞こえ承るに慰めてこそはべれ（こうしてあなたとお話し申しまた承って癒されておりますものを）。うち捨てて入らせたまひなば（置き去りに為さったのでは）、いと心細からむ（とても心細くなります）」

とて（と言って中納言は）、屏風をやをら押し開けて入りたまひぬ（屏風を静かに押し開けて御簾内に入りなさいました）。いとむくつけくて（姫はとても恐がって）、半らばかり入りたまへる

に(東母屋に半身ほど入りなさっていたが)、引きとどめられて(中納言に裾を引き留められて)、いみじくねたく心憂ければ(非常に心外で情けなく)、

「隔てなきとは(正直なお話しとは)、かかるをや言ふらむ(こういうことだったのですか)。めづらかなるわざかな(驚きました)」

と、あはめたまへるさまの(と非難なさる姫が)、いよいよをかしければ(いよいよ風情があったので)、

「隔てぬ心をさらに思し分かねば(私の素直な気持を少しもお分かり頂けないので)、聞こえ知らせむとぞかし(お教え申そうというのです)。めづらかなりとも(驚いたとは)、いかなる方に(どういうことを)、思しよるにかはあらむ(お考えになってのことでしょうか)。仏の御前にて誓言も立てはべらむ(仏前に私の誠意をお誓い申しましょう)。うたて、な懼ぢたまひそ(何もそう恐がりなさいますな)。御心破らじと思ひそめてはべれば(力づくでお気持を踏みにじる心算はございませんので)。*人はかくしも推し量り思ふまじかめれど(このような手引きをした以上は、誰も何事も無しに終わるとは思っていないでしょうが)、*世に違へる痴者にて過ぐしはべるぞや(私はそういう常識外れの変人として、あなたが厭と御思いの限りは、お話しだけで済ませます)」

*「人はかくしも推し量り思ふまじかめれど」は注に＜『完訳』は「人々は、自分たちに情交がなかったとは思うまいが」と注す。＞とある。　*「世に違へる痴者にて過ぐしはべるぞや」は注に＜『完訳』は「自分は世人と異なり、ばか正直に大君の気持を尊重するとする」と注す。＞とある。確かに、薫君はそう言っているように見える。が、そう思っている以上に、薫君は本当に「しれもの」だ。「御心破らじ」と言うが、弁の君がこうした二人だけの場を用意して、少しは不安を覚えながらも姉姫がそれを承諾した時点で、後は中納言の事の運びに任されている、ということではないか。「みこころ」は＜破って欲しい＞と姫は既に表明している。後に必要なのは説得ではない、一線を越える効し難い男の強引さのみだ。姫には、効し難い、という言い訳が必要だった。というのに、中納言は優男ぶって、本当の優しさを見せなかった。マ、言葉の上での遣り取りは、この際、ある意味、如何でも良いので、今からでも薫君が男の猛りを示せば、それでコトは収まるだろうから、以下の濡れ場に期待したい。

とて(と言って薫君は)、心にくきほどなる火影に(程良い明るさの灯明に)、御髪のこぼれかかりたるを(姫の御髪がこぼれかかっているのを)、かきやりつつ見たまへば(掻き揚げて遣ってお顔を御覧になると)、人の御けはひ(姫のお顔立ちは)、思ふやうに香りをかしげなり(期待通りに匂い立つ美しさなのでした)。

［第六段　薫、大君をかき口説く］

「かく*心細くあさましき*御住み処に(このように簡素で無防備な御小邸に)、好いたらむ人は障り所あるまじげなるを(好色な男なら難なく忍び通えそうなのに)、*我ならで尋ね来る人もあらましかば(私以外の者が此処に訪ね来ていたとしたら)、さてや止みなまし(姫に手出しせずに終わっていただろうか、いや手を出したに違いない)。*いかに口惜しきわざならまし(もしそのように誰かが姫に手を付けていたとしたなら、何と悔しいことだっただろうか)」　*「心細し」は＜心細い。不安だ。頼りない。物寂しい。＞。「あさまし」は＜意外だ。驚きだ。興ざめだ。浅はかだ。貧相だ。＞。此処の文意では、山荘の小さく簡素な造りと防御体制の貧弱さに、良くぞ姫君たちが今まで男に犯されずに済んだ

ものと、薫君が驚きもし、安堵もするということのようなので、その文意に沿って「心細くあさましき」を＜簡素で無防備＞と言い換えて置く。が、この帖では特に単語の語用が大雑把に過ぎる印象で分かり難い。　*「御住み処」は「おおんすみか」と読みがある。「すみか」は現代語では卑語っぽいが、此処でも大邸宅ではないことを示す語感がありそうだ。　*「我ならで尋ね来る人もあらましかば」は＜自分以外に訪ね来る人がいたとしたなら＞で、「ましかば」は「さてや止みなまし」の「まし」に係る＜反実仮想の構文＞と注にもある。此処では「まし」が多用されていて、且つその文意が少し分かり難いので、この際、「まし」の論理性を考えてみて、文意を確認したい。「まし」の「ま」は推量の助動詞「む」の未然形というのが、語感や語法からも分かり易い説明だ。「ま(む)」が推量の助動詞だということは、仮定構文での可能性を示す論理語だということだ。その可能性の未然状態を示す語尾活用ということは、未だ然うではない反実仮想の概念を確かに想起させそうだ。となると、「ま」で仮定構文が示されるなら、では、「まし」の「し」は何か。是を完了状態または過去を示す助動詞「き」の連体形と取るのは、「き」が未然形「ま」を受け切れるのか不安なので、形容詞語尾の「し」の類くらいに見做したい。それでも、類で逃げるのも気が引けるので少し補足すれば、この「し」は状態の助動詞「す」の連用形の中止語法で副詞語用されている、ようにも見える。ただ難点は、古語辞典に「す」は丁寧語の助動詞のように説明されていて、状態を示す助動詞とは書かれていないのだが、貴人の動作の直接表現を避けて、状態を客観表現にすることで動作主体の公的存在に対する敬意が示され、以て尊敬語や丁寧語として語用された、という理屈はどうだろう。この理屈は、現代語の「ます」「で(ありま)す」にも終止形語用が残ったなどと転用できそうだ。また、「す」を状態の助動詞と認識すれば、「ず」が状態の打消助動詞であることとの論理体系の整合性も分かり易くなるんじゃないのか。いや、文法は正に論理記号の方程式化なので、膨大な語法用例を知らなければ体系化出来る可くも無く、私のような通りすがりの者がどうこう言えたものではないだろうが、私のような者にも分かり易く体系化されてこそ本物のような気もするので、試考してみた。いや、話はまだ終わっていない。「まし」が反実仮想の一つの可能性の推論帰結だとして、それに「ましかば」という反実仮想の条件項が前置される構文の論理性が残っている。「ましかば」は恐らく＜ましくあらば＞の略だ。少なくも、「まし」が反実仮想なので、「あり」は未然形の「あら」で、已然形の「あれ」ではないだろう。接続助詞「ば」は用言の未然形に付くと仮定条件の順接文意を示し、已然形に付くと確定条件の順接または逆接の文意を示す、と古語辞典に説明される。が、未然形も已然形も実態概念を表わす表象語用ではなく、思考や意志を示す論理語用なので、仮定か確定かというよりは、未然形が主観概念で已然形が客観概念を示すと見るべきではないか。「ば」を語用した接続文は、未然形が仮定条件下での主体者の意志だから決定結論が述辞されて、他条件に付いて論じる必要がなく、結果として順接の文意になるのであり、已然形が仮定条件下での種々の可能性の検証だから、その種々の条件毎に順接も逆接も有り得るのだろう。即ち、「ましかば」は幾つかの条件に付いて論じるのではなく、特定の条件下に於ける主体者の行動予測をしている構文であって、この未然形の意味するところは反実というよりは、過去仮定を示していて、それが条件項になっている構文とは、あえて仮定するのだから、現状とは異なる事情背景を述べることとなり、此処で言う「まし」の結論も単に推論と言うよりは、確定判断の＜～に違いない＞という言い方になるのだろう。　*「いかに口惜しきわざならまし」は全体の文意としては「我ならで尋ね来る人もあらましかば」を受けてはいるが、直接の文意も構文も是の条件項は「さてや止みなまし」であり、本文には省語されているが、明示すれば＜さらば＞などの接続詞が前置されるはずだ。したがって、此処の「まし」は一般語用の推量の助動詞「む」を状態強調の副助詞「し」で修辞する為に未然形の「ま」に語尾変化させたもので、文意自体は「口惜しきわざならむかし」と同じで、感情表現としての「いかに」に対応した詠嘆の言い方なのだろう。

と(と薫君は)、来し方の心のやすらひさへ(今までの油断さえ)、あやふくおぼえたまへど(今さらに恐い気がしなさったが)、*言ふかひなく憂しと思ひて泣きたまふ御けしきの(この期に及んでは言葉も空しいと切ない気持でお泣きになっている姫君の御姿が)、いといとほしければ(と

ても労しく)、「かくはあらで(このような強引な形ではなしに)、おのづから心ゆるびしたまふ折もありなむ(姫君の方から進んで気をお許しになる時がある筈だ)」と思ひわたる(と思い続けます)。 *「言ふかひなく憂しと思ひて泣きたまふ御けしき」は、実際に薫君が御簾内に入ってきて裾をつかまれ、もう言葉では薫君が迫り来るのを制止できない状況だと判断した姫が、決して自分から進んで身を委ねたのではない、という体裁を繕うために困った表情をして見せているわけだが、こういう状況を許していること自体が、姫は既に薫君の言い寄りを許しているのであって、それが薫君には分からないかのこの設定は素直に受け入れ難い。女遊びはするが、商売女ばかりが相手で、風情遊びにはなれていない、というのが薫君の設定らしいが、全く情交経験が無いというならともかく、生身の女を相手にして来たからには、それらしい素振りや口説き文句なり、せめて褒め言葉の一つ二つが無いわけはなく、まして匂兵部卿巻二章五段には「我が、かく人にめでられむとなりたまへるありさまなれば、はかなくなげの言葉を散らしたまふあたりも、こよなくもて離るる心なく、なびきやすなるほどに、おのづからなほざりの通ひ所もあまたになるを、人のためにことことしくなどもてなさず、いとよく紛らはし、そこはかとなく情けなからぬほどの、なかなか心やましきを、思ひ寄れる人は、誘はれつつ三条の宮に参り集まるはあまたあり。つれなきを見るも、苦しげなるわざなめれど、絶えなむよりは、心細きに思ひわびて、さもあるまじき際の人びとの、はかなき契りに頼みをかけたる多かり。さすがに、いとなつかしう、見所ある人の御ありさまなれば、見る人、皆心にはからるるやうにて、見過ぐさる。」と、そこそこの身分の女たちを三条宮邸に囲っていた奔放ぶりが語られていて、思った以上に具体的だったので、つい長文引用してしまったが、むしろ引用しながら気になったのは、三条宮邸が焼けて、三条母宮が六条院で暮らしている現在、其等の女たちはどうしているのか、ということの方だった。が、それらはどこにも書かれていないのだから知る由もない。とにかく匂兵部卿巻二章五段には、「はかなくなげの言葉を散らしたまふあたりも、こよなくもて離るる心なく、なびきやすなるほどに、おのづからなほざりの通ひ所もあまたになる」とあり、「さもあるまじき際の人びとの、はかなき契りに頼みをかけたる多かり。さすがに、いとなつかしう」と、薫君は将来性や天性の薫香だけでなく、実際に女の扱いも上手だったと明示されており、その薫君が此処の場面で宇治姫を「いといとほし」と思って、それがいっそ現代語の＜とても愛しい＞なら良かったのになどと私に思わせるくらいの＜いたわしい＝可哀想＞という焦れったさで、「おのづから心ゆるびしたまふ折もありなむ」と思った、などという薫君の不慣れさは、全く説得力がない。どう考えたって、宇治姫の芝居は＜私は良い子ぶりたいんだから、後はあなたが責任を取るという姿勢を見せて、私を気楽にさせて良い気分で幸せにして欲しい＞と言っている、という以外に解釈の仕様が無い客観情勢ではないか。そして薫君は容易に責任を取れる立場であり、身分も地位も過分なほどだ。つまり、後は、薫君自身の不義の子という出自事情にこだわる深層心理が、正式に妻を娶り家を構え更には子を儲ける、ということを躊躇させている、と読者に読ませようとしているような作者の意図は気付くし、だから薫君は姫と同様に受身になりたかったようだ、という事情も察するが、とても本文の筆力がそれらを十分に伝えているとは思えない。例えば、薫君が御簾内に立ち入った際の描写は、より丁寧に具体的に示されるべきであり、薫君はどういう姿勢でどういう姿勢の姫を制したのか、私は便宜上、薫君は姫の裾を掴んだ、ということにしているが、それさえ本文には無い。また、二人がそのままで固まっている筈もなく、それから薫君は姫の肩を抱いたのか、手を取ったのか、服の下に手を滑り込ませることはしなかったようだが、むしろ情交してしまったのなら一般事情化もある程度は利くが、そうは至らぬままに二人きりの部屋で最接近していることは間違い無いだろうに、その具体描写が無いので、肝心のその時の心象事情は全て読者に丸投げされていて、私は此処にノートした事情から姫の表情や薫君の気持を推し量っては見るが、であれば、説得力があるのは匂兵部卿巻二章五段なのであって、此処の本文自体には手掛かりが無いのだから、この本文は手応えの有る筈もない、非常に舌足らずの文章になっている。

わりなきやうなるも心苦しくて(薫君は姫に情交を無理強いするのも気が進まずに)、さまよくこしらへきこえたまふ(この事態の体裁を繕おうと為さいます)。

「*かかる御心のほどを思ひよらで(このようなあなた様のお気持のほどとは知らず)、*あやしきまで聞こえ馴れにたるを(愚かしくも親しくお話し申しましたというのに)、*ゆゆしき袖の色など、見あらはしたまふ心浅さに(無念な私の喪服姿をすっかり御覧になった思い遣りの無さに)、みづからの言ふかひなさも思ひ知らるるに(私の浅はかさまで思い知らせれて)、さまざま慰む方なく(つくづく情けなく)」　*「かかる御心のほど」は注に＜以下「慰む方なく」まで、大君の詞。＞とある。宇治姫の発言文ということは、この「みこころ」は＜薫中納言の気持＞であり、その「ほど」は決して＜御簾内に立ち入った乱暴さ＞なのではなく、事此処に至っても腕づくに及ばない薫君の＜根性の無さ＞を情けなく思う姫の気持だ。が、それを口にすることは姫の沽券に関わるので、言い換え文に於いても明示は出来ない。ただし、この姫の発言文は、この場の場面描写の言葉足らずに比して、非常に含みのある名文となっていて、実に奇異だ。もし、此処以降の文がこの格調を保つとしたら、上文までとは別の筆者に代わっているのかも知れない。　*「あやしきまで」も実に微妙な言葉の綾を用いた筆致だ。姫はどうなることかと不安を覚えながらも、先に薫君が匂宮と妹姫との縁談に託けて、自分の姉姫との縁談を「かばかりうらなく頼みきこゆる心に違ひて恨めしくなむ」(二段)と迫っていたことに期待して、弁の君にも必ず薫君は姫を女にしてくれるからと諭されて、二人きりの面談に臨んだのに、これ以上姫の方からは積極姿勢など示しようも無いものを、中納言はいつまでも狼藉に及ばず、困った姫は隣室に逃げ隠れようとしたが、その時ついに薫君が姫を引き留めた。というのに、そうして体を押さえられたまま、姫の方から体を預けるのを、薫中納言は待つと言う。あまりの思い遣りの無さに姫の悲しみは、自分の判断違いだと自虐的な後悔を姫自身にさせるのだろう。とのように、この姫の発言文自体は、自身の尊厳を護りながらも、複雑な女心を見事に訴えているわけだが、是に先立つこの場の背景事情は、此処の本文には説明がなく、私は前項ノートで匂兵部卿巻二章五段を引用して解釈に務めたが、本来は、本文の意味を確認する為に前文を参照すべきもののはずで、本文に説明不足を覚えて、文意自体を探る為に前文を読者に参照させるなどというのは、およそ商業読物の作者にあるまじき執筆態度と言うべきだ。が、この物語が本質的に商業読物だと規定するに足る証拠を、私が持っているわけでもない。が、パトロン無しに書ける内容でもないだろう。　*「ゆゆしき袖の色」は下文に「墨染の火影」とあるので＜姫の喪服姿＞のことらしい。ただ、「袖の色」は＜袖で拭いた涙に濡れて色が変わった服＞という言い方だろうから、今さらは喪中の涙と言うよりは惨めな女心の涙のはずで、当然に＜無念で無様な私＞という語感が込められている、かと思う。

と恨みて(と恨み言を言って)、*何心もなくやつれたまへる墨染の火影を(空ろにやつれていらっしゃる喪服姿の自分の灯影を)、*いとはしたなくわびしと思ひ惑ひたまへり(実に情けなく悲しいと思って姫は困っていらっしゃいました)。　*「なにごころもなし」は＜虚ろ、空虚＞だろうが、此処でははっきりと＜期待外れ＞に聞こえる。が、明示には躊躇する。　*「いとはしたなくわびし」は、私のような者でも貰い泣きするほど可哀想な姫の心情表現だ。薫君の身勝手は取り返しがつかない。どうせ恥を掻かせるなら、せめて引き留めずに下がらせて欲しい。引き留めて、もっとその気を見せてくれとは、あまりに山棲みの純情を弄び過ぎる。本当に度が過ぎる。

「いとかくしも思さるる*やうこそはと(いやこれほどに情けなくお思いになるような事情だったとは)、恥づかしきに(不明を恥じて)、聞こえむ方なし(申し開きもありません)。　*「やう」は＜事情。理由。＞という語用らしい。が、薫君は自分の事情を優先させて、姫の事情を思い遣ることはない。だから、薫君は「かくしも思さるる」と口では言うが、その「かく」は姫が言う困惑に対して述べられているもので、姫が

惨めな立場に置かれているという、本当の事情に思い至っていない。こんなことなら初めから、姫の色香への自制も利かずに言い寄るなんてことは、絶対にしてはいけなかった。つくづく情けない。

*袖の色をひきかけさせたまふはしも(まだ一周忌法要前の喪中であることを理由に拒みなさるということは、確かに)、ことわりなれど(尤もですが)、*ここら御覧じなれぬる心ざしの*しるしには(この何年も御覧頂いている私の援助の賜物としては)、さばかりの*忌おくべく(そうした喪中に障ると隔てを置くような)、今始めたることめきてやは思さるべき(今始まったあなたと私との仲のようにお思いになって良いものでしょうか)。*なかなかなる御わきまへ心になむ(それは感心しないお考えですね)」　*「袖の色」は外形上は喪服のことだが、そして薫君はその心算で語用しているようだが、姫が言った「袖の色」の本心は＜姫自身の惨めさ＞であり、それに気付かず、気が利いた言い回しであるかのように是を言う薫君は、本当に残念だ。「アゲマキ」という巻名は、薫君の＜子供っぽさ＞を揶揄しているのかも知れない。子供っぽさ、は母の三条宮譲りだろうか。何だかなぁ。　*「ここら」は＜数多→この何年も＞だろうか。　*「しるしには」は＜効果としては→お返しの印に＞だろうか。だとしたら、ずいぶん恩着せがましい搦め手の説得で、いよいよ救い難い薫君の見苦しさだが、確かに物資援助の恩は重いのかも知れない。であれば、姫は本当に心苦しいだろう。　*「忌(いみ)」は此処では＜故宮服喪の忌中謹慎＞というよりは、喪中を＜支障に考える余所余所しさ＞という文意に見えるが、「忌」に其処までの語意を見做せるのだろうか。むしろ、「さばかり」を＜喪中に障るという考え＞と読んで、「忌」を＜憚る→避ける→隔てる＞と言い換えるか。　*「なかなか」は＜中途半端。生半可。なまじっか。＞で、此処では＜あまり良くない→感心しない＞だろう。何だか、薫君がまるで悪代官のように見えて来る。主人公をここまで悪役にしても良いのだろうか。それとも当時の常識では、薫君の地位からして、庇護を受けた者は媚びて当然だったのだろうか。

とて(と言って薫君は)、*かの物の音聞きし有明の月影よりはじめて(あの琵琶と十三弦の姫姉妹の合奏を垣間見た二年前の有明の晩秋の朝のことを初めとして)、折々の思ふ心の忍びがたくなりゆくさまを(季節の折々に御見舞申すたびに恋情が抑え難くなっていったことを)、いと多く聞こえたまふに(詳しくお話し申しなさると)、　*「かの物の音聞きし有明の月影よりはじめて」は注に＜薫が二年前に月明りに中に姉妹の合奏しているさまを垣間見したことから話し出して。＞とある。確かに、それまでの宇治通いの三年間に渡って、全く(であったらしいが、奇妙な設定だ)興味がなかった姫君たちに、この時を境に俄然薫君は興味を持った、と橋姫巻三章以降に語られている。また、同三章三段には「内なる人一人、柱に少しゐ隠れて琵琶を前に置きて撥を手まさぐりにしつつゐたるに」「添ひ臥したる人は琴の上に傾きかかりて」とあって、しっかりと演奏したと言うよりは、それ以前に演奏したのかも知れないが、むしろそのように有明の風情遊びに興じていた姫君たちの心豊かさを薫君は垣間見た、という描写であり、姫たちの演奏の腕前などではなく、その心豊かさに薫君は感じ入った、という語りだった。

「*恥づかしくもありけるかな(そのようなことに全く気付かないまま応対申していたとは、気恥ずかしいことだった)」と疎ましく(と姫君は嫌気して)、「*かかる心ばへながらつれなくまめだちたまひけるかな(そうした私たちへの興味を持ちながら素知らぬ顔で親切そうに援助下さっていたのか)」と(父宮存命中の中納言の見舞さえ素直に喜べないかに)、聞きたまふこと多かり(薫君の話をお聞きなさる事が多かったのです)。　*「恥づかしくもありけるかな」は注に＜大君の心中の思い。我が身の不注意を恥じる気持ち。＞とある。　*「かかる心ばへながらつれなくまめだちたまひける」については、薫君が八宮亡き後に姫君たちを世話して、そうする内に結婚を考えた、ような話は既に姫も薫君自身から聞かされていたので、それを姫が今さらに「かな」と聞き驚くのは、父宮存命中から中納言は自分たちをそういう目で見

ていたのか、という文意なのだろう。姫は薫君に恥を掻かされて、薫君への気持は嫌う方向に定まってしまっているので、後は薫君が如何に姫を敬っているかの言葉や態度を見せようと、厭な印象が広がるか深まるだけだ。ヤル時にはヤルこと以外には責任の果たしようはない。それが出来ないのなら、初めからそのような場を設けるべきではないし、図らずもそうした場になってしまったら、自ら身を引いてその場を逃げる以外にはない。なまじ経験が豊富なだけに、変に余裕ある態度が出来てしまって、良い人ぶって最低の男を演じる、などということを源氏物語の主人公に配役して良いのか、などと同じ疑問を繰返す。

御かたはらなる*短き几帳を(薫君は姫の側にある低い簡易几張を)、仏の御方にさし隔てて(仏壇側に目隠しのように向けなさって)、*かりそめに添ひ臥したまへり(親しい仲の形として姫の横に寝そべりなさいました)。　*「短き几帳」は注に＜丈の低い三尺の几帳。＞とある。慎ましさを示す目隠しで、間仕切りではないのだろう。　*「かりそめ」は＜仮→試し＞で、「添ひ臥し」は＜夫婦の真似事＞なので、これは＜形ばかりの夫婦の真似事＞らしい。

*名香のいと香ばしく匂ひて(仏前香がとても香ばしく匂って)、榕のいとはなやかに薫れるけはひも(抹香がとても強く薫っているこの仏間は)、人よりはけに仏をも思ひきこえたまへる御心にて(人よりは特に仏心のおありな薫君なので)、わづらはしく(仏前情事は気が咎めて)、　*「名香(みゃうがう)」は＜仏前香＞と辞書にあるが、具体的な香りは分からない。尤も、仏前香といえば普通にお線香のことのようにも思えたが、「榕(しきみ)」が＜抹香＞のことらしく、線香が本当に抹香臭いのかどうかさえ良く分からない私には、何とも頼りない文だが、まぁ、線香臭い部屋と思って置く。

「墨染の今さらに(服喪中のこの時期に)、折ふし心焦られしたるやうに(選りに選って堪え性も無いように、無体に及んでは)、*あはあはしく(軽率で)、*思ひそめしに違ふべければ(実の父上である故藤原君の過ちを戒めるべく、仏道を志してこの宇治山荘に自分が通い始めた思いに反するので)、*かかる忌なからむほどに(この一周忌法要が済んだら)、この御心にも(姫のお気持も)、さりともすこしたわみたまひなむ(さすがに少しは打ち解けなさって、父上のような軽率な振る舞いはせずに済むだろう)」など、せめてのどかに思ひなしたまふ(などと強いて気長に考えようと為さいます)。　*「あはあはし」は＜軽率だ＞だろうが、「軽率なこと」が「思ひそめしに違ふべければ」という論理運びには、薫君の実父の故衛門督が＜無体に及んだ軽率さ＞を忌み嫌う、という薫君の深層心理の重要な綾が織り込まれているように見える。　*「思ひそめしに違ふべければ」は注に＜『集成』は「自分の本意にも反することだろうから」。「完訳」は「仏道に志した当初の気持」と注す。＞とある。確かに、自分の自制心の未熟さを反省する文意に見えるので、大意としては従う。が、であれば、薫君は婚意自体を却下すべきように思えるが、それは取り下げず、ただ時期を待つ、ということのようだ。だって、「あはあはし」いのが仏心に反する、というよりは、婚意という＜現世未練＞こそが仏心に反する、と、私は知ったことではないが、この物語で繰り返し語られて来ているではないか。だから、この「思ひそめし」は＜故衛門督の過ちを戒めるべく仏心を志した＞とまで言って置くべきように思う。　*「かかる忌なからむほどに」は注に＜八宮の一周忌が明けたころに。＞とある。「なからむ」は＜無くなるだろう＞という未来推量。しかし、それにしても、此処で「かかる忌なからむほどに」などと後回しにして、この日には実事の無いままに姫に決定的に恥をかかせたら、もう絶対に取り返しが利かない。まして、薫君は既に姫に「いとかくしも思さるるやうこそはと恥づかしきに聞こえむ方なし」と言い放って、これ以上無理に迫る気は無い、と責任放棄してしまっていて、今現在でさえ、姫は取り残されているのだが、それでも、朝までには、どういう形であれ、ともかくは女にして貰えば、この切ない思いも報われると耐えている、というのに、薫君の方が「せめてのどかに思ひなしたまふ」のでは、いよいよ以て救いようが無い。

秋の夜のけはひは、かからぬ所だに、おのづからあはれ多かるを(秋の夜の寂しさはこのような山里でなくても自然と身に沁みるのに)、まして峰の嵐も籬の虫も、心細げにのみ聞きわたさる(ましてこの宇治山荘では峰の嵐も垣根の虫も心細いようにだけ響き聞こえます)。

*常なき世の御物語に(中納言のお話しになる早くも一周忌を迎えた故宮の思い出に)、時々さしいらへたまへるさま(時々肯きなさる姫君の姿は)、いと見所多くめやすし(とても情感があって好感が持てます)。　*「常無し」は＜無常＞よりは＜変わりやすい→時の移ろいが早い→一年が早い＞と読んで置く。「おおんものがたり」の「御」は故八宮への尊称と読んで置く。

*いぎたなかりつる人びとは(様子見で寝付けずに眠たがっていた女房たちは、二人のその仲睦まじげな姿に)、「かうなりけり(それらしい形に収まったようだ)」と、けしきとりてみな入りぬ(と判断して皆寝入りました)。　*「いぎたなし」は＜寝坊だ→眠たがっている＞という語らしい。何度か出て来た語だが、「寝ぬ(いぬ、眠る)」という語自体に馴染みが無い所為か、「きたなし」は「汚し」で＜寝姿が見苦しい＞みたいな語感のようだが、どうもその＜汚さ＞にばかり気を取られて、私には下品な言い方に聞こえてしょうがなく、どうも王朝物語に違和感を覚える。

*宮ののたまひしさまなど思し出づるに(父宮の仰っていたことなどを思い出しなさるに)、「げに、ながらへば(確かに生き永らえると)、心の外にかくあるまじきことも見るべきわざにこそは(思いの他にこのような情け無い目に遭うものだ)」と(と姫君は)、*もののみ悲しくて(ただもう悲しいばかりで)、*水の音に流れ添ふ心地したまふ(王族ながらに辺境へ下向する川の流れに沿って流れて行くような惨めな気がなさるのでした)。　*「宮ののたまひしさま」は椎本巻二章四段に姫君たちにも八宮は直接訓戒していたが、古女房たちにも、姫の御前でかと思われるが、「かかる際になりぬれば、人は何と思はざらめど、口惜しうてさすらへむ、契りかたじけなく、いとほしきことなむ、多かるべき。もの寂しく心細き世を経るは、例のことなり。」と言って、だから姫に男の取次はするな、と厳しく制していた。「のたまひしさま」が「こと」ではなく「さま」と客観的なのは、この女房たちへの八宮の訓戒を指しているのかも知れない。尤も、八宮は姫たちにも直接、「かう人に違ひたる契り異なる身と思しなして、ここに世を尽くしてむと思ひとりたまへ。ひたぶるに思ひなせば、ことにもあらず過ぎぬる年月なりけり」と、この宇治山荘での独身人生を覚悟しろと言い放っていて、王家身分ならではの処世の辛さを説いていたので、その「いとほしきことなむ多かるべき」宿命を、今、正に「げに」と姫は思い知ったのかも知れない。　*「もののみ」は＜ただもうそういうものとして＞という言い方、らしい。　*「水の音に流れ添ふ心地」は注に＜『奥入』は「辺風は吹き断つ秋の心緒、隴水は流れ添ふ夜の涙行」（和漢朗詠集、王昭君、大江朝綱）を指摘。＞とある。「王昭君(わうせうくん)」は大辞林に＜中国、漢の元帝の後宮の美女。名は嬙(しよう)、昭君は字(あざな)。紀元前 33 年、匈奴(きようど)の王、呼韓邪単于(こかんやぜんう)が漢の元帝の王女を妻に求めたとき、親和政策により王女の身がわりとして嫁がせられ、その地で死んだ。後世、元曲「漢宮秋」などにうたわれた。生没年未詳。＞とある。当時は「王昭君」が悲劇の女として有名だったから、この姫の悲哀の表現にも引いた、ということなのだろうか。といっても、「王昭君」という中国の故事の内容を「漢宮秋」などの詩文から知ったであろう当時の日本の知識人たちに於いて、その故事を題材に漢詩を作るということは、一度原詩を和訳して、再度漢文化するという作業になったようで、つまりは中国原詩を知る知識人の仲間内での漢文演習問題または其に基づく言葉遊びの趣きであったらしく、七言八句の漢文律詩の第三、第四句らしいこの「辺風吹断秋心緒　隴水流添夜涙行」も、昭君の夷行光景を示す類型化された文言の一つで、蛮地下向を意味するようだ。

［第七段　実事なく朝を迎える］

*はかなく明け方になりにけり（そのまま静かに朝になりました）。　*「はかなし」は＜あっけない。むなしい。頼りない、特にどうということも無い。大したこともない。＞などだから、実事無く、そのまま情交することも無く、という言い方のようだ。が、それにしても、選りによって、ややこしい言葉を使うもんだ。当時なら、是ではっきりものを言っていることになったのだろうか。もし「はかなさ」が＜空虚さ＞なら、男の性としては、射精後の虚脱感は排泄欲求を果たしたという安堵感として、どんなに大事な相手との、どんなにうまく性反応がかみ合った濃厚な情事であっても、それは生理反応として伴う感覚ではありそうだ。が、大事な女と結ばれたという幸福感は、その一時的な虚脱感さえ充実感に思えるはずで、「明け方になりにけり」という全体感想の修辞副詞としては相応しくない語用に思える。女の性については、私には実感はないが、性反応の興奮がある以上は、必ずや一定の限界点への到達感を経て平常化へ収束する安堵感はある筈で、その生理反応も恐らくは虚脱感を伴うかと思われる。そして多分、相手への信頼感情は子を宿し守り育てる母性からして、男以上に依頼度の強いものになるような気がするので、尚更「はかなし」は不相応だろう。ともあれ、「はかなく」朝になれば、一つの結論が出た、という意味では成り行きを案じる不安感は失せて、平常心に戻るという限りでの安堵感はあるのだろう。が、現代と違って、いや現代でも現実にはあるものの、制度として明示されていないだけだが、男女が親しくなることは血縁関係を変えて、以て富の移動と一族勢力の盛衰を伴うことに成りかねないので、特に高家に於いては厳密に身分を意識して、安易に友人関係となることは厳しく戒められており、その計算外の事故による富の喪失と勢力帰属の失敗を避ける為の防衛策として、公式に外交折衝を受け持つ男は相手の情報を得る為の礼儀として、また自明の相互条件として、相互に話し合いの席に着くための防護を解く取引材料の手始めとして、自己情報の開示の一つとして、顔を曝さねばならず、当然に顔は隠せないが、内政を受け持つ女なら外部から顔を隠せる、という事情から、女を家に隠す、ということは古今東西の人間社会で広く採用された風習らしく、男の方は女と顔見知りとなることで気楽に親しくなれた気になったとしても、女は血縁関係を変える計画や計算も立たない内に、全く富の移動に関わらないほどの身分違いの相手となら初めから契約無効なので問題も無いだろうが、契約が有効に成立し得る相手の男に素顔を曝したこと、には内情暴露という重大な情報漏洩の責めを負うので、顔見知りになることに決して気楽に親しくなれたとは思えないだろう。だから、「はかなく」朝になれば、男は「痴れ者」で済んでも、女は取り返しの付かない「恥さらし者」だ。それでも、女がその恥を恥ずべき家族が居ない立場なら、辛うじて次回の援助を受けるまでは関係性が保留されるので、一時的に独立した家主として、男と同等な立場で相手に親しめたと思えるかも知れないが、それも別口の援助依頼先があって薫君との縁を断るか、座して死を待つ以外には、結局は彼を受け入れるしかない立場であり、もし守るべき家族があった場合は、その保留期間中でさえ、ただただ落度として内的に心理圧力を受け続けるだろう。

御供の人びと起きて声づくり（従者が起きて帰り支度の合図の咳払いをし）、*馬どものいばゆる音も（馬たちがいななく声からも）、旅の宿りのあるやうなど人の語るを（別れの朝の旅の宿の風情を同じように詠んである白居易の歌などが）、思しやられて（薫君には思い出されて）、*をかしく思さる（今回の宇治行が生き別れに因んでいるような興趣深い感慨を覚えます）。　*「馬どものいばゆる音も」は注に＜『奥入』は「晨の鶏再び鳴いて残月没りぬ、征馬連に嘶えて行人出づ」（白氏文集巻十二、生別離）を指摘。＞とある。生き別れについては、一段の姫君が名香の糸を作っているらしい場面で紀貫之の古今集羇旅の歌が引かれていたが、この白居易の詩も同じような情緒なのだろうか。旅先の宿での別れの日の朝の光景、ということだろうか。漢詩を引かれると、どうも作者が男っぽく感じられて、女房語りの印象が変わるような気もする。いや、良く分からないし、だからどうと関われるわけでもないが、男の目線なのか女の目線なのかという語り口の違いは、いく分は聞き手である私の観劇気分に影響はする。「いばゆ」は＜いななく＞らしい。　*「をかしく

思さる」は＜興趣深くお思いになる＞で、薫君はこの朝の光景にいつになく旅情を感じた、ということのようだ。が、それは漠然とした非日常感というよりは、姫との仲が別れに終わるかも知れないという不吉な予感と、それも仕方が無いという醒めた気持ちと、今現在浸っている秋の宇治の風情の奥深さを懐かしむ気分が混じり合った感慨であるかのように読める。といっても、此処の原文本文は、尤も此処に限らないが、私にはまるで読み下せず、文意は専ら注釈に頼って得ているわけだが、斯様に漢文を引く文意は、繰り返しだが、深みがあると言うよりは、才が立ち過ぎる気がしてならない。注釈の労には敬服するが、先ず面倒臭い。

光見えつる方の障子を押し開けたまひて(薫君は光が差して来る東側の襖戸を押し開けなさって)、空のあはれなるをもろともに見たまふ(空が明けて刻々と変わってくる様子を姫と一緒に御覧になります)。*女もすこしゐざり出でたまへるに(男と共に夜を明かした女の形になった姫も御簾外の廂間に少し膝を進めなさると)、ほどもなき軒の近さなれば(奥行きの狭い廂のことで軒先も近くに見えて)、しのぶの露もやうやう光見えもてゆく(屋根を覆う忍草が垂れ下がって滴る露も次第に光って見えてきます)。　*「をんな」については、注に＜『集成』は「見た目には、恋をする男女の体なのでこう言う」と注す。＞とある。確かに、そういう場面であり、そういう場面であれば、そういう言い方をする、ということらしい。が、やはりドキッとする言い方だ。セツナイ、という意味で。

かたみにいと艶なるさま、容貌どもを(互いにとても優美な姿、形であるのを)、

「*何とはなくて(世間で言う夫婦などという形にとらわれず)、ただかやうに月をも花をも(ただこのように二人睦まじく月や花を)、同じ心にもてあそび(同じ気持で愛でて)、はかなき世のありさまを聞こえ合はせてなむ、過ぐさまほしき(遣る瀬無い人生を慰め合って暮らしたいものですね)」　*「何とはなくて」は注に＜以下「過ぐさまほしき」まで、薫の詞。『完訳』は「夫婦というわけでなくとも」と注す。＞とある。従う。が、薫君がこの＜夫婦などという形にとらわれない＞ことを、まるで現代人のような気楽さで、文字通り「何とはなくて」という心算で言ったのに反して、姫は決して「何とはなくて」などと気楽に是を受け止められる筈も無い、だろう。姫はそんな気楽な立場からは遥かに遠い重い立場にいる。本物の王家と王家筋との決定的な違いかも知れない。勿論、それ以前に、男と女の立場の違いがあるのは言うまでもない。

と(と薫君が)、いとなつかしきさまして語らひきこえたまへば(とても優しい口調でお話し申しなさると)、やうやう恐ろしさも慰みて(姫も次第に緊張も緩んで)、

「*かういとはしたなからで(夫婦でないなら、このように身内のように顔を曝した他人への礼を失した形ではなく)、もの隔ててなど聞こえば(几張越しなどの顔を隠した他人を敬う形でお話しできれば)、*真に心の隔てはさらにあるまじくなむ(見せ掛けの真似事の親しさではなく、本当に本心から隠し立てを全く無くせるかと)」　*「かういとはしたなからで」は注に＜以下「あるまじくなむ」まで、大君の詞。「かう」は直に対面する体裁悪さをいう。＞とある。本文はずいぶんあっさりとした言い回しなので、軽く読み過ごしそうだが、姫の立場からすれば非常に重たい内容を話している、かと思う。「体裁悪さ」は良く＜世間体＞といって、表面を取り繕えば済むもののように言う場合も多いが、「世間体を繕う」ということは、その人の生き方そのものである場合が少なくない。一定の＜世間体＞を保つ生活をする事が、その人が其処に居る意味であることは、むしろ普通の日常だ。「世間体」は個人の全要素から見れば、一部分の属性かも知れないが、その属性は＜社会性＞なのであり、実際の有機生活上は決定的な要素と成り得るものだ。仕事の主体が自己実現である人よりは、生活の糧である人のほうが圧倒的に多いのは現実だ。だからこそ、その有機性物理原理からして、作

動している社会機構は信用できると客観的に判断できる。自己実現は主観だから他人には必ず他人事であり、客観的な価値判断基準は設定できない。で、その主観共有を客観的に見做すのが夫婦契約なんじゃないのかな。ただ、主観はあくまで個体の固有判断なので、共有はあくまでも仮想設定であり、当事者間に於ける意志であり希望的観測であり、場合によっては誤解と錯覚で、だから便宜上の見做し概念だ。ただ、社会制度は見做し概念に基づいて構築されるので、決して社会的な意味、は同時に当事者個人の人生の意味でもあるが、は小さくはない。　*「真に心の隔てはさらにあるまじくなむ」は薫君の気楽さに対する、姫の痛切な非難皮肉なのだろう。今の二人の仲睦まじさは、実は「隔て」のある＜真似事に過ぎない＞と言い切っている。鋭い、と言えば鋭いのだろうが、ただ、この論理明快さが妙に男手を思わせて、女房語りらしからぬ印象ではある。

といらへたまふ(と姫はお応えなさいます)。

明くなりゆき、*むら鳥の立ちさまよふ羽風近く聞こゆ(明るくなって行く空に鳥の群れが飛んで行く羽ばたく音が近くに聞こえます)。夜深き朝の*鐘の音かすかに響く(早朝の鐘の音が低く響きます)。「今は、いと見苦しきを(もう人目に付いて見っともない)」と(と姫は)、いとわりなく恥づかしげに思したり(とても困って恥ずかしくお思いなのでした)。　*「むら鳥の立ちさまよふ羽風近く聞こゆ」は注に＜『河海抄』は「むら鳥の立ちにし我が名今さらにことなしぶともしるしあらめや」（古今集恋三、六七四、読人しらず）を指摘。＞とある。早速に「古今和歌集の部屋」サイトの当該ページを頼ると、訳文に＜ 群れた鳥が飛び立つように一斉に広がってしまった私の噂、今更何ごともなかったかのように振舞っても、何の効果があるでしょうか＞とあり、なるほど、此処の言い回しが、古歌を下敷きにした姫の心象風景を表わした名文である事が知れる。ただ、どうも私に男手の先入観がある所為か、才々しいというか、あざとく聞こえるような気もする。　*「鐘の音かすかに響く」は＜周囲で自分たちのことをひそひそと噂する声＞の比喩らしい。「かすかに」は＜遠く＞ではなく＜低く＞だろう。

「*ことあり顔に朝露もえ分けはべるまじ(結ばれてもいないのに、さも女を抱いた男のような顔をして朝帰りするわけにも行きません)。*また、人はいかが推し量りきこゆべき(また世間の人は、私の朝帰りをどう思い申しますものやら、元々噂がある所に如何にもそれらしくあっては、いっそう噂が立ちましょう)。　*「ことあり顔」は注に＜以下「こそかひなけれ」まで、薫の詞。完訳「わけあり顔に。朝露を分けて女のもとから帰るのは、後朝の男の典型的な姿。大君のつれなさを恨む気持もこもる」と注す。＞とある。　*「また」は現代語も同じだが＜それに、その上に、更に＞と上文を別視点から補強する意図を示す前置副詞なので、この「人はいかが」は＜いっそう噂が立つ＞という文意になる。

*例のやうになだらかにもてなさせたまひて(今も普段どおりに穏やかに振舞いなさって)、*ただ世に違ひたることにて(ただ普通の夫婦とは違う形ということで、信頼関係は同じなのだから)、今より後も、*ただかやうにしなさせたまひてよ(今後もちょうど昨晩と同じように私と親しくお付き合いください)。　*「例のやうに」は注に＜『集成』は「いつものように何気なくお振舞いになって」。『完訳』は「普通の夫婦のように穏やかにおふるまいになって」と訳す。＞とある。『集成』に従いたい。此処での薫君の意識は、対邸内の今現在の女房の目、になっているかと思う。世間の人に対する意識は上文の「また人は」で語られているかと思う。　*「ただ世に違ひたることにて」は注に＜『完訳』は「実事のない親交をさす」と注す。＞とある。従う。が、こういうことを気楽に話す薫君の神経は、あまりに姫に対する気遣いに欠けて、却って実相かと思えるほどだ。此処の「ただ」は＜単に形式上の違いで本質的には問題無い＞という意味での事物を軽視する副詞語用。　*「ただかやうに」の「ただ」は＜ちょうど、正に＞と同様形態の近似を強調する語用。

よにうしろめたき心はあらじと思せ(私に背信は無いとお思い下さい)。かばかりあながちなる心のほども(これほど一途にあなたを思う私の胸の内を)、あはれと思し知らぬこそかひなけれ(信じて頂けないのでは遣り切れません)」

とて、出でたまはむのけしきもなし(といって薫中納言はお帰りになる様子もありません)。

あさましく、かたはならむとて(姫君はそれを信じられない見っともない事として)、

「今より後は、さればこそ(今後こそはそのように)、もてなしたまはむままにあらむ(為さるがままで宜しいでしょう)。今朝は、また(今朝はそれとは別に、此方の都合もございますので)聞こゆるに従ひたまへかし(私が申すのに従ってお帰りください)」

とて、いとすべなしと思したれば(と言って、本当に始末に困りなさると)、

「*あな、苦しや。暁の別れや(何とつらい朝の別れか)。まだ知らぬことにて(此処からの朝帰りはまだ為た事がないので)、げに、惑ひぬべきを(本当に道に迷いそうだ)」　*「あなくるしや、あかつきのわかれや」は当時としても芝居がかった台詞回しだろう。「まだしらぬことにて〜」は薫君の上機嫌を示す軽口冗句だ。

と嘆き*がちなり(と薫君は嘆いて見せます)。　*「〜がちなり(〜気味だ)」は現代語でも揶揄表現だ。

鶏も(にはとりも)、いづ方にかあらむ(何処からか)、ほのかにおとなふに(遠鳴きして)、京思ひ出でらる(薫君には都の朝が思い出されて、こう贈歌します)。

「山里のあはれ知らるる声々に、とりあつめたる朝ぼらけかな」(和歌 47-03)

「山里に 声さまざまの 朝ぼらけ」(意訳 47-03)

*注に＜薫から大君への贈歌。「とりあつめたる」に「鳥」を響かす。＞とある。渡り鳥の羽音も、山寺の鐘の音も、鶏の声も、山里の風情だ。が、薫君が山荘に来ると、従者が声を上げ、馬がいななき、鶏の声も京風に鳴く。山里に都の風が吹くのだ。ずいぶんと背負った、権威者振りが鼻に付く詠みっぷりだが、薫君に悪気はない。自分は善意の白馬の騎士、の心算らしい。

女君(姫はこう返歌なさいます)、

「鳥の音も聞こえぬ山と思ひしを、世の憂きことは訪ね来にけり」(和歌 47-04)

「鳥も鳴かない山奥に、浮世の憂さは訪ね来る」(意訳 47-04)

*注に＜大君の返歌。「鳥」「山」の語句を受けて返す。『異本紫明抄』は「飛ぶ鳥の声も聞こえぬ奥山の深き心を人は知らなむ」(古今集恋一、五三五、読人しらず)『集成』は「いかならむ巌の中に住まばかは世の憂きことの聞こえ来ざらむ」(古今集雑下、九五二、読人しらず)を指摘。＞とある。姫は薫君に終始皮肉で答えているが、

薫君はそれさえ風情遊びとして受け止めているらしい。姫の本気に気付かない。というか、それに気付くくらいなら、とっくに責任を取って、姫を女にしているのだろう。

障子口まで送りたてまつりたまひて(中納言は姫を東母屋の御部屋の襖戸口まで送り申し上げなさって)、昨夜入りし戸口より出でて(自分は昨夜仏間母屋に入った南襖戸口から御簾外に出て)、臥したまへれど(廂客間で横になりなさったが)、まどろまれず(眠れません)。

名残恋しくて(姫の許を去るのが名残惜しくて)、「いとかく*思はましかば(これほどまでに姫を思うようになるのだったら)、月ごろも今まで心のどかならましや(どうして何ヶ月も今まで気長にしていたのだろう)」など、帰らむこともの憂くおぼえたまふ(などと薫中納言は帰るのも気が進みなさいません)。　*「思はましかば」の「ましかば」は現状の反実仮想構文ではない。「かく思ふ」のは薫君の現状事実であって、過去の想定を変えて推論する過去仮定構文の条件項を示している。

[第八段　大君、妹の中の君を薫にと思う]

*姫宮は、人の思ふらむことのつつましきに(姫君は女房たちが思っているであろう自分が中納言の女になったらしいという想像が恥ずかしくて)、とみにもうち臥されたまはで(直ぐにはお休みになれずに)、　*「姫宮」に付いては、注に<『完訳』は「この巻では、以下、大君をも姫宮と呼ぶ」と注す。「人」は女房をさす。>とある。ただ、「姫宮」はローマ字読みには「ひめぎみ」とあり、写本が「ひめぎみ」なら「姫宮」の漢字表記は変だし、写本に「姫宮」とあるなら読みは「ひめみや」の筈で、何が問題なのかさえ私には分かり難い。渋谷校訂の底本は大島本ということのようだが、どこかで誰かが写し間違えたか、この姫については、出自は王家に間違いないが、実態は本流から外れて公的庇護が無いようなので、「宮」でも「君」でも実質的な違いは無いような気がするが、生活実感として当時の人々がどういう立場の人として認識していたか、は示されそうな気もして、多分、それが問題かとは思うが、其処に写し間違いが入って、原文の厳密さが損なわれているとしたら、もうお手上げなんじゃないのか。

「頼もしき人なくて世を過ぐす身の*心憂きを(頼れる親が居ないで処世する私の立場の頼りなさから)、ある人どもも(今居る女房たちも)、*よからぬこと何やかやと(好ましくない縁談を何かと)、*次々に従ひつつ言ひ出づめるに(出自身分に応じて持ち出すので)、心よりほかのことありぬべき世なめり(心外な結婚をしてしまいそうな情勢だ)」と思しめぐらすには(と考え回らしてみるに)、　*「心憂きを」の「を」は上の状態を受けて、下にそれを条件とする事柄を述べる<～なので>という接続助詞語用。　*「よからぬこと」は分かり難いが、女房たちが「次々に従ひつつ言ひ出づめる」事柄であってみれば、姫の価値観からする<身分の低い者との好ましくない縁談>のようだ。　*「つぎつぎ」は<身分序列>。

「この人の御けはひありさまの(中納言殿の御素性や立ち居振る舞いが)、疎ましくはあるまじく(卑しい筈もなく)、故宮も、さやうなる*心ばへあらばと、折々のたまひ思すめりしかど(亡き父宮も私に結婚したらどうかと度々仰りお思いだったようだが)、みづからは、なほかくて過ぐしてむ(私はやはりこうして独身で過ごそう)。　*「こころばへ」は姫の意向らしい。「あらば」の「あら」は客観事象ではなく主観意志の仮定を示す未然形なので、接続助詞「ば」は<～である場合には>という条件提示の意味ではなく、本人の意思が<～であるのか>という確認文意を示すので、「心ばへあらば」は<その気があるなら→その気はないのか→決心しないか>という言い方になるようだ。

我よりはさま容貌も盛りにあたらしげなる中の宮を(私より姿、形も女ざかりで廃らすには惜しまれる妹宮を)、人なみなみに見なしたらむこそ*うれしからめ(人並みに結婚させることが喜ばしいだろう)。人の上になしては(妹の結婚ということなら)、心のいたらむ限り思ひ後見てむ(出来るだけの御世話をしよう)。みづからの上のもてなしは、また誰れかは見扱はむ(私は誰も頼るまい)。　*「うれし」は、此処では自分が＜満足だ＞ということよりは、事態が＜喜ばしい＞という語用なのだろう。「む」の已然形「め」が意志であろうと推量であろうと、事柄自体が自分のことではなく妹の結婚なのだから、姉姫の気持ちは客観意に成らざるを得ない。自己説得だ。姫はこれ以上自分の体裁が傷付くのは耐えられないし、薫君を悪者にもしたくないので、妹君を出汁にして事態を丸く収めたかった、に違いない。出汁だろうと何であろうと、妹自身にその気があれば事は納まるだろうが、その気が無ければ絵に描いた餅だ。が、今の姫にとっては自分の頭を整理して気を落ち着ける事が全てだ。でないと人格破壊する。それくらい重い事態だろう。

*この人の御さまの(中納言殿の昨夜の御応対が)、*なのめにうち紛れたるほどならば(普通の男のように無風流に乱暴であったなら)、かく見馴れぬる年ごろの*しるしに(このように長年親しんできた御礼のしるしに)、*うちゆるぶ心もありぬべきを(縁談を受け入れる心算でもあったものを)、*恥づかしげに見えにくきけしきも(昨夜の体面が保てずに分かり合えない状態では)、*なかなかいみじくつつましきに(どうにも何ともならず、とても結婚できないので)、わが世はかくて過ぐし果ててむ(私はこのまま独身で通そう)」　*「この人の御さま」は先に「この人の御けはひありさま」とあった「御さま」と「御けはひありさま」という単語自体の意味に於いては、然程の差異があるとは思えない。ただ、「けはい」は行動よりは仕種や物腰、あるいは風格や資質といった個体属性を示しているようには思うが、それもその時点での「けはひ」という語用なら、何らかの動作や態勢を言う場合もありそうで、是等は単語自体の定義付けが曖昧なまま、文意から語意を読み取るという単語の未発達性によるもので、意図した曖昧語用ではない、かと思う。で、此処の「おおんさま」は＜昨夜の薫君の行動ないし応対姿勢・態度＞のことを指しているらしい。　*「なのめ」は＜なだらか。平凡。＞。「打ち紛る」は＜紛れる。目立たなくなる。＞ともあるが、此処では＜どさくさ紛れ←節度無く無理をする＝狼藉に及ぶ・強姦する＞と読んで置く。で、そう読めば、是が昨夜の中納言に無体が無かったことの明示文と見做せるので、此処で実事が無かった事が確認できるわけで、この章立ての「第一章」とした副題に＜薫と大君の実事なき暁の別れ＞とあるのは、あまりに事前暴露で本文の味わいを損なう配慮に掛けた言い方に見える。せめて＜薫と大君の対面＞くらいに抑えて置くべきかと思われる。　*「しるし」は＜形に表れて当然の効果→返礼のお示し＞という語用、かと思う。縁談受諾は世話を受けた者としての社会規範、という面は厳然とあるのだろうし、今後も世話を受けるのなら、むしろ進んで血縁関係に繋がる情交関係を結びたい所だろう。　*「うちゆるぶ心もありぬべきを」の「べし」は意志意であり、昨夜の面談が覚悟の上だったことの明示だが、是は姫の内心文だからこそ明示できるのであって、決して口には出来ない、特に薫君本人には口が裂けても言えない、女王の沽券に関わる一大決心なのだった、のだろう。姫の方から望むとは言えないから、強引に薫君に抱いて欲しかったのに、薫君ははっきりと望むと言ってくれと言う。姫の気持ちは通じなかった。が、薫君の方は気持ちが通じたと思っているらしい。始末が悪い。　*「恥づかしげに見えにくきけしきも」は注に＜『集成』は「あまりに立派で近づきがたい薫の様子なのも。「見えにくし」は、親しく夫婦の語らいもしにくい気持」と注す。＞とある。が、同意しない。姫は、薫君が普通の男だったら自分が引き受けて、立派な男だったら妹に譲ろう、などと考えていた訳ではない。そも姫君には、そのような主体的な姿勢は初めから無いし、何もこの場に限ったことでもないだろうが、少なくもこの縁談事に、姫は企画力も指導力もない。それに先ず、「けしき」は「御」が無いことからしても、薫君の＜御態度＞なのではなく、姫の、というか、姫と中納言の仲の二人の＜状態、事情＞のことだろう。で、「はづかしげ」は＜きまりが悪い→不都合だ＞。「見え難し」は＜結婚できない＞であり＜分かり合えない＞であり＜気持ちが通じない

＞でもあるという複意語用のようだ。　*「なかなか」は＜却って＞や＜生半可に＞と言う副詞語用ではなく、どっちにしても落ち着かないという中途半端さの＜どうにもならない＞という認識の形容説明。「いみじ」は＜非常に悪い＞という物性形容。「つつまし」は＜遠慮される。憚られる。→決して出来ない＞という事情形容。

と思ひ続けて（と考え続けて）、音泣きがちに明かしたまへるに（声を上げそうに泣きながら夜を明かしなさると）、*名残いと悩ましければ（その悩ましさがとても苦しく）、中の宮の臥したまへる奥の方に添ひ臥したまふ（妹君が寝ていらっしゃる寝台の奥側に添い寝なさいました）。　*「なごり」は＜その余情→その悩ましさ＞。

例ならず（昨夜はいつもと違って、姉君が寝室に居らず中納言殿を接客なさっているとのことで）、*人のささめきしけしきもあやしと（女房たちが小声で話している話題の御二人の仲もどうなるのだろうと）、この宮は思しつつ寝たまへるに（妹君は不安に思いながら寝ていらしたが）、かくておはしたれば（今は姉君がこうして側にいらっしゃるので）、*うれしくて（一先ずは事が穏やかに進んだものと、安堵して）、御衣ひき着せたてまつりたまふに（掛布団を姉君に掛け直して差し上げなさると）、御移り香の紛るべくもあらず（姉君は中納言殿の移り香が隠れようもなく）、くゆりかかる心地すれば（薫って来る気がして）、*宿直人がもて扱ひけむ思ひあはせられて（以前門番が中納言殿に頂いた狩衣が移り香が強くて不似合いだと揶揄されて持て余していたことも微笑ましく思い出されて）、「まことなるべし（姉君は中納言殿と、本当に結ばれたらしい）」と、いとほしくて（と感激して）、寝ぬるやうにて*ものものたまはず（今は共に充実感に浸りたいと、敢えて姉君を起こさず、添い寝するように黙って見守りなさいます）。　*「例ならず」は＜いつもと違って＞だが、下にある「かくておはしたればうれしくて」の前振りとなる＜おはさず＞が語られていないので、敢えて言い換え文ではその事情を明示補語して置く。　*「人のささめきしけしきもあやしと」は、渋谷訳文には＜女房がささやいている様子が変だと＞とあり、与謝野訳文には＜おそくまで話し声がするのを怪しく＞とある。この事情説明項は下の「まことなるべし」の前振りとなっている、と読みたいので、この「けしき」は＜御二人の仲に付いての話題の行方＞と読んで置く。　*「うれし」は、昨夜の姉と薫君の遣り取りの子細は分からず、今後の成り行きは不明ながらも、今はこうして姉君が横に寝ていることに一先ず安堵した妹君の実感、と読んで置く。　*「宿直人がもて扱ひけむ」は薫君の残り香から連想されたことだろうが、門番の姿は滑稽な印象だった筈で、その和やかさを思う妹君の心理は、姉君と中納言殿の結婚を祝う気持ちなのだろうし、姉君に訪れた女の幸せを心から喜ぶという意味で＜同情する＝「いとほし」＞のだろう。　*「ものものたまはず」は＜何も言えない＞のではなく＜黙って見守る＞という妹君の姿勢なのだろう。

*客人は（客人である薫中納言は）、弁のおもと呼び出でたまひて（弁の君を呼び出しなさって）、*こまかに語らひおき（詳しく昨夜の事情を説明して）、*御消息すくすくしく聞こえおきて出でたまひぬ（姫への御挨拶の伝言を型通りの生真面目さで申し置いて出発なさいます）。　*「まらうと」は薫中納言のことだろうが、呼び方ひとつで場面説明をする、というのはこの物語の一つの特徴だ。即ち、薫君離荘の場面。　*「こまかに語らひおき」は、薫君が弁の君に、昨夜の姫との面談模様を詳しく説明したのだろう。恐らくは、自分の好意は伝えたが、喪中に付き情事は遠慮した、との内情までを打ち明けた、かと思う。というのは、薫君が弁に内情を知らせたとすれば、下の「すくすくし」が非常に味わい深い語用になるからだ。　*「御消息すくすくしく聞こえおきて」は注に＜『集成』は「しかつめらしく口上を申し上げておいて」。『完訳』は「姫宮への伝言をきまじめにお申しおきになって」と注す。＞とある。『完訳』に従いたい。ただ、「すくすくし」は堅苦しい他人行儀な型通りの挨拶だろうし、それはまだ一線を越えていない、ということを傍目に明示するという薫君の意図な

のだろうが、薫君以外の者には事があっただけに平静を装うという逆の明示にも受け取られかねず、弁の君は内情を知って、姉姫の心中を慮り当惑していたのではないか、と思われる場面。

「*総角を戯れにとりなししも(中納言殿がお詠みになった「揚巻」の洒落は求婚の仄めかしを戯れに為さったものと承知しながらも)、*心もて(私自身も進んで)、*尋ばかりの隔ても対面しつる*とや(催馬楽の「総角」のような淡い期待を持って対面に臨んだ、とのように)、この君も思すらむ(妹も思うに違いない)」と、いみじく*恥づかしければ(と姉姫は非常に恥ずかしく)、心地悪しとて(気分が優れないと)、悩み暮らしたまひつ(横になって一日過ごし為さっていました)。

*「あげまきをたはむれにとりなししも」は注に＜以下「思すらむ」まで、大君の心中の思い。薫の歌をさす。＞とある。中納言の「おおんせうそこ」を姉君が寝所で伝え聞いた、という場面転換なのだろうか。それとも、直接には上文を受けない時系列描写なのだろうか、とても分かり難い。が、ともあれ「戯れにとりなしし」は姫自身の心積もりを言っているのだろうから、「たはむれ」が照れ隠しの語用だとしても、姫が中納言との面談に臨んだ動機の明示であり、中納言の勇気を期待していたという証言なので非常に興味深い。なお、薫君の歌は「あげまきに長き契りを結びこめ同じ所に縒りも会はなむ」(和歌 47-01)という求婚の仄めかしだった。そして、この歌にある「あげまき」は＜名香の糸の飾り結び＞に掛けてある。　*「心以て」は＜自分から進んで＞で、当然に内心文ゆえの心情吐露だが、数少ない明示なので珍重したい。尤も、姫が中納言の暴力的支配を期待していたことは、面談の場を設けた時点で自明ではあるが、中納言の女々しさが話を複雑にしているので、本文での明示はやはり貴重だ。　*「ひろばかりのへだて」は注に＜催馬楽「総角」の歌句。＞とある。催馬楽の「あげまき」は＜年長の少年＞を意味している。この「あげまき」の洒落語用が、此処の姫君の台詞回しの肝だ。「ひろ」は＜大人が両手をいっぱいに広げた長さ＞で、「へだて」は物理的に＜それだけ距離を取って離れている＞という言い方ではあるが、一方で「ひろ」が＜大人ほどに髪が伸びた子供＞であってみれば、その「へだて」は＜思春期の異性意識＞でもある。　*「とや」は＜とのようになるだろうか＞という疑問構文だが、「と」とまとめられた上記事情は此処では仮想ではなく、姫自身の内実暴露であり、「や」の疑問意はその事実認識自体への疑義ではなく、他者がその事実をどのように認識するか、という疑義を示す。「この君も」の「も」は、私と同様に妹も、だ。　*「はづかし」は姫にとって、決して一時的なきまり悪さ、見っともなさではなく、自身の尊厳がかかった体面が保てないという重い認識であったのだろう。姫は、八宮が言った王家の尊厳を持って死ねという言葉を、長女として重く受け留めたのだろう。ただ、中納言と好意を持ち合うことまで禁じられた訳ではなく、むしろ八宮も薫君を信じて姫との結婚を望んでいたほどだ。だから、他の相手なら考えもしないが、中納言ならと気を許した。それも、中納言なら王家の尊厳を理解し、その重荷を姫に代わって背負ってくれるだろうと期待した。なぜなら薫君は、王家の尊厳のために都を嫌って隠遁生活をしていた八宮を敬って宇治通いをしていたもの、と姫は思っていたからだ。しかし薫君の思いは、何も王家の尊厳に共感していたのではなく、ままならぬ世を嘆く厭世観に共鳴して、その隠遁生活に憧れていたものだ。だから姫と結ばれるには、自分の恋心だけでなく、そういう運命にあると思えるような姫の積極姿勢を求めた。まして、権威体現者は八宮ではなく中納言というのが客観情勢であり、生活実態としても王家の姫より源氏の薫君の方が遥かに貴人然としている。が、それでも姫自身は、故父宮の遺志に従い、宇治に隠遁した八宮の気持ちを大事にしたかったし、宇治に山住みして来た自分たちを誇りたくて、効しようもなく流された運命として中納言の情けを受けたかった。互いに引かれてはいたが、互いにより強い相手の働き掛けを必要としていた。よくある話という気もするが、ちょっとした意地の張り合いと言うよりは、相当に根深い思いのようで修復の見込みは薄い。

人びと(女房たちは)、「*日は残りなくなりはべりぬ(法事までの日数が残り少なくなりました)。はかばかしく(法事の準備を順序立てて)、はかなきことをだに(細かなことまで)、また仕うまつ

る人もなきに(姫君の他に取り仕切る人もいないので)、折悪しき御悩みかな(今寝込まれますのは困った御不調です)」と聞こゆ(と申します)。　*「日は残りなくなりはべりぬ」は訳文に＜法事までの日数が少なくなりました＞とある。このような上文の話題を直接引き継がない発言話法の背景事情の省略語文で、良く斯様に文意が取れるものだと感心する。下文の内容が法事の準備らしいので、それに先立つ文脈として類推できたのかもしれないが、普通に読み進んで、この文を直感的に左様に読み下せる人がいるとすれば、いや、居そうな気がするので、敬服するし、感性の違いを思う。

中の宮(妹君は)、*組などし果てたまひて(組紐など作り終えなさって)、　*「組などし果てたまひて」は注に＜名香の組糸。総角に組み上げる。＞とある。この文意も私には難しい。

「*心葉など(飾り組紐の結び方が)、えこそ思ひよりはべらね(良く分かりませんので)」　*「こころば」はざっと祝い喜び敬う気持ちを示す飾り物を言うらしく、此処では飾り組紐の結び方のことらしい。

と、せめて聞こえたまへば(と姉君に飾り結びの作成をせがみ申しなさると)、暗くなりぬる紛れに起きたまひて(日が暮れて目立たなくなった暗がりに紛れて起き出しなさって)、もろともに結びなどしたまふ(妹君と一緒に姫は飾り結びをお作り為さいます)。

中納言殿より御文あれど、「今朝よりいと悩ましくなむ」とて、*人伝てにぞ聞こえたまふ(中納言殿から後朝の御手紙があったが、今朝からひどく体の具合が悪いので、と言って姫は女房の代筆で御返事申しなさいます)。　*「人伝てにぞ聞こえたまふ」は注に＜『集成』は「女房の代筆でお返事なさる」と注す。＞とある。「ひとづて」は＜人を介した応答→代返→代筆＞という語用らしい。

「さも、見苦しく、若々しくおはす(後朝の御手紙に代筆で御返事なさるとは、いかにも体裁が悪く、子供っぽくいらっしゃいます)」と、*人びとつぶやききこゆ(と女房たちは姫君の非常識をぶつぶつなじり申します)。　*「人びとつぶやききこゆ」は注に＜『集成』は「薫からの文を、後朝の文ととる女房たちは、大君のはにかみと見て文句を言う」。『完訳』は「薫からの大事な後朝の文なのに大君は返事さえ書かない、の気持。大君の結婚を頼みに思う女房たちの、世俗的打算からの非難」と注す。＞とある。